

7世紀の地域社会と領域支配

播磨国揖保郡の古墳と寺院, 郡里の成立

Local Communities and Governance of Domains in the 7th Century :
Kofun, Temples, and Establishment of Villages in Ibo County, Harima Province

岸本道昭

KISHIMOTO Michiaki

①播磨国揖保郡18里

②18里の比定と古墳・寺院

③古墳被葬者と寺院の檀越

④里の領域と設定原理

⑤7世紀の地域史的画期

おわりに

【論文要旨】

400 年間も続いた古墳築造社会から律令体制への時代転換にあたって、新たに導入された地方支配方式の史的画期を追究する。『播磨国風土記』をひも解き、郡里領域を比定しながら、古墳や寺院の地域の実態と比較する。検討の俎上に載せた地域とは、播磨国揖保郡 18 里である。

郡内において、6 世紀半ば以降の後期前方後円墳が 11 基、後期古墳は 1255 基を数えた。古墳の造営集団は約 400～500 家族（戸）を想定するが、分布や墓域は風土記に記す里領域とはほとんど整合しないことがわかった。有力な終末期古墳は数が限定され、これも分布実態は里領域と合致しなかったが、むしろ郡司層を被葬者に考えることができた。

いっぽう、7～9 世紀に建立された古代寺院は 14 カ寺を数え、1 里 1 寺に迫る分布を示している。古墳と異なって、寺院は里を意識した建立がなされている。寺院が地域社会の統合を促進し、知識寺院としての役割が想定できる。また、官道である山陽道と美作道が通る里での寺院建立は徹底されていたことから、護国仏教の浸透とあわせ、往来から見せる律令国家の機能を考えた。

18 里の設定原理を探ったところ、里の総面積に大きな差があっても、開発（生産）面積は小差で均等的であることがわかった。このことから、里は従来からの古墳を媒介とする族制的支配を否定し、均等的かつ網羅的な土地の領域支配の基礎単位と推定する。里は開発面積を前提に土地領域として区分され、地域社会の賦課と徴税単位として設定された。それは律令国家を支える地方社会の基礎単位であり、現実にそれを統括したのは郡司層であった。

人的支配であった古墳に代わる新たな地方支配の原理は、土地の領域支配であった。風土記や里領域の分析、寺院建立の実態から、播磨地域における領域支配の実質的開始は 7 世紀末の持統朝と考えられる。

【キーワード】 後・終末期古墳、知識寺院、播磨国風土記、里の領域支配、開発（生産）面積

①……………播磨国揖保郡18里

約400年間も続いた前方後円墳の時代——いわゆる古墳時代は、その長さの特異性がもっと問題にされてもよいと考える。しかも、前方後円墳という列島独特の首長墓は、成立から廃絶まで約350年間も造り続けられた。考古学研究者は古墳の彼方に「首長」という権力を見出し、広がりや格差から社会関係を描くのが一般的である。中央と地方の概念を認めるなら、中央が地方支配に腐心する国家形成過程をいかに読み取るかは積年の課題であり、今も議論は絶えないところである。古墳は人格的権力を象徴する記念物でありながら、中央と地方の政治的な同盟関係として描かれてきた。現実には王権と地方首長の関係であるにもかかわらず、古墳被葬者の保有する有形無形の資産や基盤は、当たり前のように律令制下の国郡里郷の名を借りた説明がなされている。そうした地域名の具体性とは裏腹に、実態として見渡せるはずの首長支配領域は不明瞭なままである。

その古墳時代も7世紀に至って変化が訪れる。まず、一部地域を除いて前方後円墳がほぼ造営を停止し、群集小古墳が群れをなして造られた後、終末期古墳が漸減しながら造営されている。前方後円墳の廃絶を重視するか、あるいは廃絶を迎える過程で後の律令国家への移行はどのような史の変動をともなったのであろうか。歴史的画期を重視する立場からはさまざまな問いと解が試みられてきた。

古墳時代の主要な研究は、考古学の方法によるその時代を代表する特徴的な資料、すなわち古墳そのものに向けられてきた。その古墳が廃絶したことによって、新たな研究素材として考古学は寺院や官衙、都城に視点を移していく。いっぽうで土地制度史、文献史学による律令体制の研究が加わって豊かな古代史像が追究されてきた。しかしながら、方法論の相違は埋めがたく、膨大な考古資料の蓄積と文献史学の研究成果は、積極的に触れ合うことが難しいままである。

7世紀とは時代の転換期であり、考古学と文献史学と称される分担があるように、研究者の軸足をも変えてしまう大きな変革があったことだけは確かである。その大きな変革とはいかなるものか、前代と連続する部分と不連続の部分をどのように描き出すか、それが7世紀史を解明する課題であると言えよう。そのような問題意識を持って、ある地方社会の実態から細かい分析を積み重ね、前後の6～8世紀まで気を配りながら、7世紀を考えてみるのが小稿の目的である。

さて、7・8世紀の地域社会を描写する地誌『風土記』は、叙述であるが故、実に雄弁である。ここで対象とする『播磨国風土記』は、世に出た江戸時代末期から解説〔井上1931、秋本1958、植垣1997など〕が重ねられ、研究書、論文、自治体史に至るまで、多くの書籍が刊行されてきた。『播磨国風土記』の特徴は、地名説話にかなりの重点がおかれ、常陸国や出雲国の風土記とはまた異なり、ある意味では官命に忠実な執筆態度を色濃く残していると言えよう。また、「郷」を使わず「里」表記が貫徹されているため、古い当初の形態をとどめる記述とされている。さらに、未完成原稿を疑う部分もあり、新しい内容が追加された形跡は薄いとみられる。まさに、7世紀の研究素材としては申し分のない史料である。

『播磨国風土記』のうち、対象とする郡は揖保郡である（図1）。豊かな自然と歴史的環境が残る揖保郡域では、現代においてさえ風土記に描かれた郡と里の風景や地名を多数残している。地域社

会が単純な平野で、目印となる歴史的道標が少ない場合は、郡里の範囲や境界を比定することは困難であろう。しかし、揖保郡の場合は、山に囲まれ、川が流れ、変化に富む地形環境と遺称地名が残っている。加えて、豊富に残る考古学的な遺跡を参考にすれば、播磨国12郡（2郡は欠）のうちでも揖保郡は、地図上に具体的な里の範囲すら描き込むことが可能な地域である。目的が比定地探しではないため、より具体的な自治体史〔石田1978、福島1996、2005、坂江ほか2005など〕からたどってその検証をおこなうことは省略するが、7世紀の歴史的動向を分析するにあたって、里についての最低限の地理的比定についてはまずおこないたい。

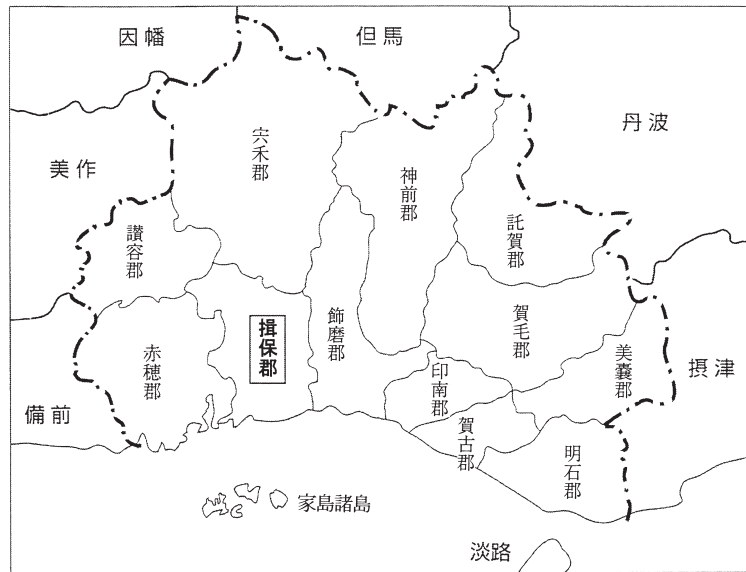


図1 古代の播磨国揖保郡

里の設定された理由とその史的意味を考えるには、いわゆる五十戸一里制を念頭におくことは避けられない。そのため、集落や人口の分析を探る手がかりとして、豊かな考古資料である古墳と寺院を素材とする。古墳は、6世紀後半以降の後期古墳の実態を分析する。後期古墳なら、築造集団や人口規模などが7世紀社会まで投影されている可能性が高く、資料としての有効性を認めるからである。それに加え、同時代遺跡である古代寺院——いわゆる7世紀後半に成立する白鳳寺院を追跡し、官道である大路山陽道と小路美作道が揖保郡内を横断しているという地域の特徴も重視する。

いっぽう、里の比定から導かれた「土地」という風景を、面積という数値化によって比較検討する。律令国家が地方の掌握を進めるにあたり、土地という空間を読み取る領域設定がどのような道具立てとして機能し、その政治的意思がいかに反映されているかを探るためである。

以上のような分析を通じて、6～8世紀の地域社会動向を素描する過程で、7世紀がどのような史的画期として位置づけられるかを考えてみたいと思う。

以上のような分析を通じて、6～8世紀の地域社会動向を素描する過程で、7世紀がどのような史的画期として位置づけられるかを考えてみたいと思う。

②……………18里の比定と古墳・寺院

検討の前提

揖保郡は18里からなる大郡である。中国山地は水ノ山に端を発した揖保川下流域を包括し、現在の行政区域ではたつの市、揖保郡太子町、加えて姫路市・相生市の一部を含んでいる。もっとも、揖保郡は宍粟郡（7里）を分割したとされるので、もともとは揖保川流域全体を指して南北に長く、

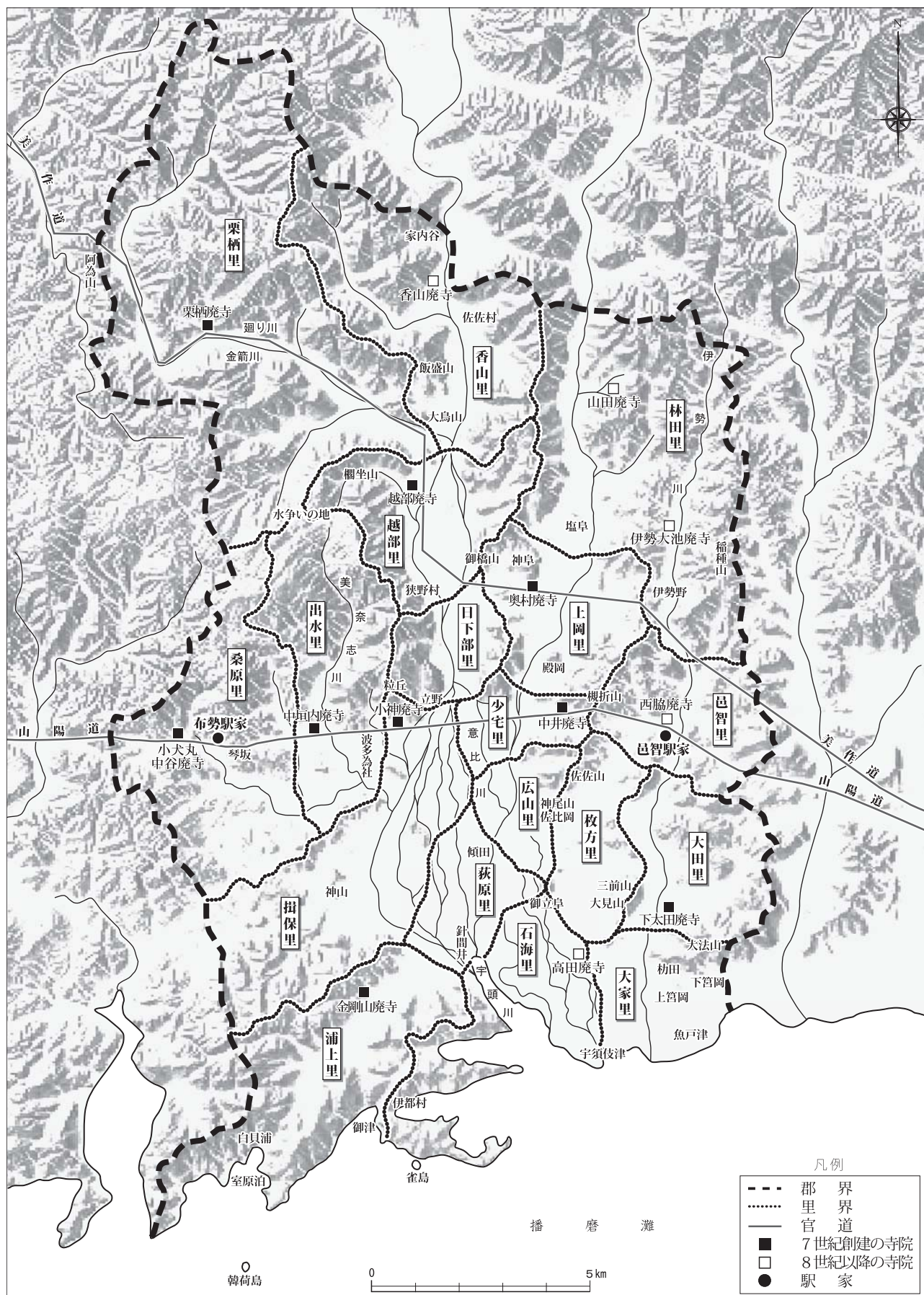


図2 摂保郡18里の古代地図

表1 揖保郡18里の古墳・寺院・官道

遺跡 里名	後期古墳 (100基以上)	後期前方後円墳	有力終末期古墳	古代寺院 (数字は時期)	官道	備考(郷との関係など)
香山				香山廃寺(8)		香山郷
栗栖				栗栖廃寺(7)	美作道	栗栖郷
越部	○		はっちょう塚7号墳	越部廃寺(7)	美作道	越部郷
上岡				奥村廃寺(7)	美作道	上岡郷
日下部						廃止
林田				山田廃寺(9) 伊勢大池廃寺(8)	美作道	廃止
呂智	○		破磐神社西古墳	西脇廃寺(8)	山陽道	大市郷
広山						廣山郷
枚方		檀特山西5号墳				廃止
大家		山戸12号墳 薬司古墳 丁丁山1号墳				大宅郷
大田				下太田廃寺(7)		大田郷
石海	○	小丸山古墳 権現山59号墳		高田廃寺(9)		石見郷+新田郷
浦上		金剛山6号墳 無駕恵2号墳		金剛山廃寺(7)		浦上郷
萩原						廃止
少宅				中井廃寺(7)	山陽道	小宅郷
揖保		西宮山古墳 養久山19号墳		小神廃寺(7)	山陽道	揖保郷+中臣郷+神戸郷
出水	○			中垣内廃寺(7)	山陽道	廃止
桑原		播磨塚古墳	長尾薬師塚古墳	小犬丸中谷廃寺(7)	山陽道	桑原郷+布勢郷

東を流れる中小の河川、林田川と大津茂川流域をも含む広大な郡であった。また、瀬戸内海の家島群島も揖保郡下に記しており、播磨灘においても広大な海域を領有している。

『播磨国風土記』揖保郡条では、18里について北から記しており、やや蛇行しながらも時計回りに巡っている。本節でも、風土記の記載順にしたがって里を巡り、比定地を定めながら当時の人々が視認していた範囲を推測してみる。風土記の記述は、山川出版社版〔沖森・佐藤・矢嶋 2005〕を原則的に使用し、里に関しては筆者が具体的に検討した成果〔いひほ学研究会 2009〕を使用する。

次に、7世紀の地域社会がどのような集団構成と規模で成り立っていたかを考えるため、後期古墳と古代寺院を各々の里毎に探索する。揖保郡の範囲全体で、古墳の総数は約1500基を数える。そのうち1255基（実態は1300基超であろう）が後期古墳である。7世紀末の古墳は、まさに風土記と同時代の古墳であるが、なお不詳な部分が多い。そのために、検討する時間幅を少し広げ、6世紀後半までの約150年間を検討の射程に据える。後期古墳全部を分析の俎上に載せ、具体的に数え、当時の集団構成や規模を推定する基礎的素材とする。なお、5世紀以前の前・中期古墳は、時間的に隔たりが大きいため除外する。また、ここで分析する考古資料の大半は大宝令以前であり、郡が評と呼ばれていた時代のものであるが、風土記を素材としているため郡を使用する。

古代寺院については、発掘調査結果はもちろんであるが、瓦の出土や心礎、柱礎石の存在などから推定できる。かねてから揖保郡における古代寺院の多さは注目されており、再度簡単な紹介をおこなう。それら寺院の成立は 7 世紀後半が大半で、風土記の記載とは同時代の遺構である。ただ、風土記以後の 8 世紀以降に成立する後発寺院についても、里という地域社会の特徴を示す手段になりうると考え、加えておくこととする（図 2・表 1）。

各々の古墳と寺院は、『兵庫県遺跡地図』[兵庫県教育委員会 2011] を基本文献として拾い上げ、『古代寺院からみた播磨』[第 3 回播磨考古学研究集会実行委員会 2003]などを参照する。各報告書等は提示を省略したが、言及すべき必要な文献はその都度示すこととする。古墳群に付した数字は古墳の数である。なお、各文献によって名称や数、認識に齟齬が生じている場合もあるが、原則は『兵庫県遺跡地図』を優先して記述する。『播磨国風土記』は大前提の史料として、単に風土記と記す場合が多く、断らない限り記述の内容は風土記の記載を指している。

(1) 香山里

香山里は揖保郡北端の里である。現在のたつの市新宮町の北部にあたり、中央を揖保川が南流している。記された地名とその遺称地として、「香山」は香山、「家内谷」は家氏、「佐佐村」は上笹と下笹、「飯盛山」は天神山、「大鳥山」は大鳥山に比定する。「阿竺村」については遺称地がない。明治時代の香島村を中心として、おおむね複数の風土記地名と現在の地名が合致するため、里の範囲はある程度が限定できる。

里の北限として、宍粟郡に分割された比治里にみえる「宇波良村」（山崎町宇原）「比良美村」（新宮町平見）の手前に郡界を引くことができる。東は山の尾根を境界とし、西は篠首の谷奥に至る。南は越部里比定地までは下らないため、大鳥山の南を流れる栗栖川を南限にしておく。

後期古墳は 56 基を数えている。北部では香山古墳群 8、家氏古墳 1、揖保川東岸では上笹古墳群 15、下笹古墳群 3、里の南部では宮内常吉古墳群 8、天神山古墳群 5、宮内古墳群 16 である。特に天神山 1 号墳は金銅製の馬具を保有するなど、揖保郡域でも最大級の石室規模を持つ有力古墳[中濱 2005]である。里内では大きく 3 カ所に分かれて古墳群が形成されている。

古代寺院としては、里の北部域、揖保川右岸に香山廃寺が知られている。香山古墳群のすぐ前面に位置し、比較的小規模な寺院と推定される。その時期は瓦の検討[今里 1995]によって、8 世紀前半に創建され、9 世紀半ばまで存続した寺院とされている。香山里は、古墳の数はそれほど多くはないが、8 世紀になって寺院を営む里である。

(2) 栗栖里

栗栖里は揖保郡北西端の里である。たつの市新宮町の北西部、栗栖川一帯の地域を比定する。川は曲がりくねっており、山は深く谷は狭いため、平地に乏しいが広大な領域を擁している。明治時代の東栗栖村と西栗栖村、現在も東栗栖・西栗栖などと呼び習わされる地名である。他に栗町地名も存在する。「廻り川」「金箭川」は栗栖川の姿形をよく表し、鍛冶屋や矢原垣内・金井地名も残る。「阿為山」は相坂峠に比定し、その西側は讃容郡（佐用町三日月）となる。

里の範囲として、北西部は香山里との境界および牧・奥小屋までを含み、相坂までである。南は

田幸山の稜線を通して善定の奥、善定川と札楽川の湧水源までを含み、その山塊は出水里との境界に至る。東は栗栖川が南折する付近で収束すると考えられる。

本里の後期古墳は27基を数えている。千本古墳1、鞍背山古墳1、能地横松山古墳群3、平野宮山古墳群5、平野大鳥井古墳群3、芝田古墳群14である。調査がおこなわれた古墳はなく、特記すべき事実は知られていないが、本来の数はもう少し多いとみられる。

狭隘な平野部を縫うように栗栖川が流れ、里の中央部北岸に栗栖廃寺がある。山裾の狭い範囲に方形鬼瓦3枚と軒瓦などが出土しているが、これも小規模な寺院と推定される〔今里2005〕。栗栖里は美作道が通る里である。官道である美作道沿いに点々と分布する古代寺院には共通する珠文帯複弁六葉蓮華文軒丸瓦が知られており、本寺院でも例外ではない。創建は7世紀末から8世紀初頭と推定される。風土記に記載された「若倭部連」が檀越となって造営した寺院と推定し、彼は栗栖里長を務めたとも考えられる。

(3) 越部里

越部里は揖保郡北部域の中心的な里である。たつの市新宮町の中央、南よりに展開する里で、揖保川の氾濫源ではあるが、やや広い沖積平野を擁する。越部は明治時代の越部村である。北は香山里と栗栖里の境界までとし、西は「欄坐山」とされる祇園嶽とその一帯の城山（亀山）の尾根、南は「狭野村」とされる佐野までである。東は「御橋山」の記事中「山の石、橋に似たり」が屏風岩を指すことは疑いなく、この「御橋山」は鶴嘴山に比定され、これが東限になる。したがって、この里の範囲は地理的にもまとまりを有し、地名からも理解しやすい。なお「鶴住山」は明確ではない。

越部里はもともと「皇子代里」と呼び、勾宮（安閑）天皇の時代に「三宅を此の村に造りて仕へ」と記されている。『日本書紀』安閑二年条にも「播磨国越部屯倉」とあって、風土記の記載と整合的である。越部里が中央との関係において重要な地域であったことは疑いない。また、他の里と比較して、注目すべき古墳の存在や築造数の多さも際立っており、こうした前史を反映したものと考えられる。

本里の後期古墳数は186基を数えているが、本来は200基以上を想定できる濃密な分布状態を示している。新田山古墳群7、市野保裏山古墳群5、市野保古墳群83、市野保蔵谷古墳群7、馬立古墳群32、馬立平山南古墳群6、馬立南山下古墳群19、はっちょう塚古墳群17、下野田古墳群2、曾我井北山古墳群3、曾我井赤禿古墳群5である。市野保古墳群は揖保郡北部域ではその築造数からみると最大規模の群集墳である。馬立古墳群では百濟系の初期横穴式石室を持つ姥塚古墳が著名で、径約18mを測る2段築成の円墳、6世紀半ばの築造である。はっちょう塚7号墳は一辺25m3段築成の方墳で、石室の全長は約9mの規模を誇り、7世紀半ばの築造とされている〔中濱2005〕。

越部里の後期古墳は、姥塚のような渡来系有力墳からはじまり、はっちょう塚7号墳のような終末期古墳まで続き、築造数も揖保郡北部では最多である。

市野保古墳群の谷が東へ開く位置に、古瓦出土遺跡が知られている。『延喜式』に美作道「越部」駅家が記載されるため、この遺跡を越部駅家にあてる説もある。ただ、小路の駅家が瓦葺であったことは十分検証されておらず、一般的には越部廃寺と呼ばれている。現存する薬師堂の土壇を建物

跡と見立て、本里にも小規模な寺院が造営されたものと推定される。出土瓦は美作道沿いの寺院と共通しており、7世紀後半から8世紀末まで存続したと推定されている〔今里2005〕。

越部里については、「越部屯倉」を反映するかのようには後期古墳の築造数もさることながら、複数系列としての古墳群形成も顕著である。加えて、美作道と駅家、越部廃寺の建立など、資史料の質量は揖保郡北部において最も豊かな里である。

(4) 上岡里

上岡里は揖保郡の北東部、越部里の南東に位置する。たつの市神岡町を遺称地とし、明治時代の神岡村である。風土記の記述は本条に関してやや乱れており、一般的には越部里条の後半部、狭野村の直後からを上岡里条へ編入させて読んでいる。里名の起源となった「神阜」は、私見によれば美作道沿いの愛宕山を有力候補とみる。「殿岡」に関しては、里の南端付近に今も殿岡と呼ばれる小字と独立丘陵がある。なお、「菅生」地名は遺称地がない。

里の範囲として、北部は現在の林田町との境界付近を考える。風土記は、林田里から上岡里を分割したことを示唆している。また、出雲国の阿菩大神が大和三山の争いを諫めんと上って来たとき、と記していることから、美作道は上岡里を通過すると考えられ、それが想定される北限でもある。東限は追分の丘陵で、林田里下伊勢との境界、西は沢田の丘陵尾根を境界としたい。北西部の越部里との区分がはっきりしないが、揖保川の渡し付近、越部里条に記された「狭野」や「御橋山」以東に設定できる。

本里の後期古墳は71基を数えている。大住寺古墳群59、野森神社裏古墳群10、沢田古墳群2である。大住寺については、本来の数はもっと多かったと推測している。野森神社裏古墳群では終末期の組合せ式石棺が知られている。

愛宕山の山裾には奥村廃寺が造営されている。この寺院は発掘調査によって全容が推定可能であり、木造基壇とされる金堂とその背後に講堂、金堂の東西に2塔を配置する伽藍配置が明らかになっている。講堂は金堂の背後に位置する。出土瓦では、珠文帯複弁八葉蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、因幡の岡益廃寺や玉鉾等ヶ坪廃寺にも同范瓦がある。これに組み合う軒平瓦には手描きのパルメットが線刻されているのが特徴である。寺の南面に美作道が通ると推定され、幢竿支柱も発見されている。

(5) 日下部里

日下部里は揖保郡条の中でも、特に比定が不明瞭な里である。その理由は、里名の由来が土地ではなく人の姓に因っており、比較的小さな里であったためであろうか。遺称地はなく、『和名抄』ではすでに郷名にみえていない。ただ、「日下部野」内部の「立野」の由来において、土師弩美宿禰（野見宿禰）が出雲往来の途中で病死し、墓を造った時に人々を連れ立て、川礫を運び伝え上げたことから立野と呼ぶ、という記述がある。そこで現在の龍野町、龍野城下町付近を含むと考えるのは自然であろう。

以前から日下部里は、龍野町およびその南の日山、小神あたりまでを含めて考えられていた。これは野見宿禰の造墓伝承が影響し、有力古墳である狐塚古墳や西宮山古墳を考慮したためであろう。

私見では、古墳と野見宿禰とを結びつける根拠がない以上、日下部里はむしろ反対に龍野町の北部を比定すべきと考える。風土記の記載順では越部里→上岡里の次にあることから南に偏りにくいこと、日山と小神は揖保里に属すると考定していること（後述）、野見宿禰の記述が美作道と関係が深いとみているからである。そうすると、北は現在の北龍野および島田あたりを含み、越部里の「狭野」と上岡里に接する付近が北辺であったと考えられる。

本里の範囲は不明瞭であるが、龍野町付近は動かないとみる。その龍野町の西方、台山の高所で4基の古墳が確認されている。いずれも終末期の小型石室を有するようである。龍野小学校の校庭にある竜山石製の組合せ家形石棺は、本里からの出土と思われるが古墳は明らかではない。なお、野見宿禰墓伝承の候補となる古墳は諸説あるものの、その墳墓については比定できていない。現在、祀られている「墳墓地」は、古墳の可否すら明らかではない。

(6) 林田里

林田里は揖保郡の北東端に位置する里である。現在の姫路市林田町付近が遺称地で、明治時代の林田村と伊勢村の一帯を指す。この里は林田川と大津茂川という二つの中小河川を含むもので、上岡里を分割するまではかなり広大な範囲を里としていたようである。

林田として現在も遺称地が残り、「松尾阜」は松山、「塩阜」は塩の池、「伊勢」は上伊勢と下伊勢に比定できる。「伊勢川」は伊勢村を南流する大津茂川、「稲種山」は伊勢の東部に位置する峰相山系と思われる。特に稲種山は、「山の形、亦、稲積に似たり」とあり、南から見て通称トンガリ山と呼ばれる三角形を呈する山に比定される。さらに、社を山本に立てて山の岑に在す神を祭った、とある記述は、多賀八幡神社または柳神社を指している可能性がある。

里の範囲として、林田川流域の北辺は宍粟郡安師里比定地手前の松山・山田あたりまで、南は美作道想定路線までである。伊勢村の大津茂川流域では、北端を大堤付近とし、南は石倉を限りとするべきであろう。東西に関しては二つの河川流域の両岸、山の稜線を境界とみなせる。

上岡里を分割したくらいであるが、後期古墳の数は9基しか知られていない。小佐見古墳、八幡古墳、上伊勢古墳が各1、狐塚古墳群2、ドンデン古墳群4である。特にドンデン古墳群は終末期の方墳群〔大谷2010〕で、7世紀を通じて継起的に造営されたようである。上伊勢古墳も7世紀後半の終末期古墳である。本里では比較的新しい古墳が散在しているが、一般的な6世紀後半から7世紀前半までの群集墳は確認されていない。

古代寺院としては、山田廃寺と伊勢大池廃寺〔今里2010〕がある。里内に二つの寺院を擁する点で特異な里であるが、いずれも小規模な仏堂を営む寺院であろう。山田廃寺は心礎が知られているが、採取瓦は続播磨国府系瓦で9世紀に下るといふ。いっぽう、伊勢大池廃寺は複弁八葉蓮華文軒丸瓦などから8世紀創建の寺院としておこう。本里は内部に2寺院を営みながら、なぜか『和名抄』の郷名に残らない里である。

林田里の7・8世紀は、大津茂川沿いに古墳が偏在し、寺院の存在もあるので、「伊勢野」側に地域集団の主力が存在したようである。在地神を祀ることで漢人が安心して暮らせるようになって里となしたと記すように、「伊勢野」開発と鎮守が一体として語られている。

(7) 邑智駅家(邑智里)

風土記は本里を、里ではなく邑智駅家（以下、邑智里）と記し、大路古代山陽道の敷設と駅家設置という背景を有する里である。揖保郡の中央部、東端の里で、明治時代は太市村であった。

邑智駅家は、『延喜式』では「大市駅家」である。駅家比定地は太市中遺跡で、馬屋田や前田など駅家関連地名に加え、古瓦の散布が知られている。「邑智」は「大内」とであると風土記は記す。「槻折山」は西隣の少宅里との境にある槻坂が遺称地で、「冰山」「蒲阜」については遺称地がなく不明である。ただ、「蒲阜」項に記載される「石の穴」は、当里破磐神社の名祖となっている割れた巨石、大磐石と考えるなら、「槻折山」の南にある「石の穴」の記述と結びつく可能性がある。

里の範囲として、北辺は石倉の谷奥あたり、西は槻坂峠まで、南は枚方里と抵触しない揖保郡太子町広坂付近、馬山あたりまでと考えたい。

本里の後期古墳は 120 基と多いが、西脇古墳群がその大半を占めている。本古墳群は 100 基近い数の古墳が発掘調査を受け、7 世紀初頭から末までの時期が大半である。8 支群にわたる群構造、多様な埋葬施設、連続して構築される墳丘など、終末期の様相を知ることのできる数少ない古墳群〔西口 1995〕である。山陽道の敷設と駅家設置が 7 世紀後半と推定されるなら、西脇古墳群の被葬者は邑智駅家の経営と無関係ではありえない地域集団と推定される。比較的小さな里に多くの古墳造営がなされた理由はこのあたりに求められる。他に、口池ノ崎古墳、破磐神社西古墳（浄安寺古墳）、観音寺古墳が各 1、太市中古墳群 20 がある。破磐神社西古墳は 7 世紀後半の単独墳である。玄室を一石で構築しようと意図する終末期の有力巨石墳である〔中濱 2010〕。西脇古墳群のような群集墳に埋没しないあり方から、邑智里長を被葬者に想起させる勢威を誇る。

また、邑智駅家から山陽道を隔てて北側には西脇廃寺がある。現地に塔心礎が見えているが、採取されたという瓦は播磨国府系瓦で、8 世紀後半を示している〔今里 2010〕。この寺院も大規模な伽藍を考えにくく、小さな仏堂を営んだものであろう。

本里でみられたように、終末期古墳と駅家、寺院が集中するあり方は、播磨国山陽道の各地駅家周辺でみられる現象であり、里長＝駅長＝檀越の姿をうかがうことができる。揖保郡内では布勢駅家周辺でも同様のまとまりが看取される。

(8) 広山里

広山里は揖保郡中央部、やや東寄りに位置する。明治時代の誉田村であり、たつの市誉田町広山を遺称地とする。この付近は、平野部であるため里の境界を判断することが難しい。本里条に記載される「麻打里」は、里が山の誤記ではないかと推定されるほか、文意が通らない部分、後述の枚方里と記事が重複するなど、記述に乱れが多い里である。「意比川」は林田川に比定されるが、流路は変化するし遺称地も残っていない。東縁の丘陵も、枚方里との里界を推定させるが、両里で記述が重複するため、境界線の判断が困難である。西の出水里（後述）から放った矢が本里まで飛来し、ことごとく突き刺さったという記述も、揖保川と揖保里を間に置くため西限の境界を推定しにくくさせている。

いずれにしても、それほど大きな里ではなく、北は少宅里に届かない内山あたりまで、東は「佐

佐山」の遺称地とされる楽々山（笹山または明神山とも）と「佐比岡」に比定される坊主山あたりまでであろう。南は萩原里に及ばないたつの市誉田町井上や太子町鵜あたりまでとするほかない。西限は林田川と揖保川の流路が簾状に南流する平野部のうち、せいぜい誉田町上沖・下沖が限界ではないかと思われる。

本里では内山古墳群の45基が後期古墳として指摘できる。広大な里ではないが、内山集落の山麓に、まとまった数の古墳が築かれている。ただ、調査を受けていないため特記事項には乏しい。なお、寺院の存在も知られていない。

（9）枚方里

枚方里は揖保郡中央、やや南東部の里である。現在の揖保郡太子町で、明治時代の龍田村、斑鳩村の一部を含む位置にある。遺称地として平方・佐用岡の地名を残しており、周囲の山名などから、ある程度の範囲を推定できる。なお、枚方里名は、河内国茨田郡枚方里の漢人がこの地に来たことにちなむと記している。

「佐比岡」「神尾山」の比定地は新しい見解〔飯泉1994〕を採用し、坊主山と広山里の「佐佐山」＝楽々山の明神山に比定できる。楽々山（明神山）には、「比古神」と「比売神」に対応させる巨石信仰の2奇岩が現存しており、男明神と女明神と呼ばれている。「佐比岡」は佐用岡という遺称地名が残っており、楽々山の南に位置する坊主山で疑いない。「佐岡」については不詳である。「大見山」は応神天皇が山から四方を望覧し、立った処に大磐があるという。この記述に対応するのが望見に適した檀特山であり、山頂の奇岩の存在も整合する。山の前、三つありという「三前山」の記述は、同じく檀特山を指す。北西へ突出する3尾根を有する点で、景観が合致している。「御立阜」は立岡地名と独立丘陵の立岡山に遺称地を残す。

里の範囲としては、北は邑智里の南限まで、西は楽々山や坊主山あたりまで、東は後述する大田里に届かない範囲、南は檀特山と立岡山までと、一定の領域推定が可能である。

本里には25基の後期古墳を数える。松尾古墳、北山古墳、柳山古墳が各1、東保山古墳群3、広坂古墳群4、丹生山古墳群6、檀特山西古墳群4、立岡山古墳群5が内訳である。特に檀特山西5号墳は横穴式石室を内蔵する前方後円墳であり、揖保郡域では最後の前方後円墳の一つである。なお、本里に古代寺院の存在は知られておらず、『和名抄』の郷名にも残っていない。

（10）大家里

大家里は揖保郡南東端の里で、瀬戸内海に面する。現在の姫路市勝原区と大津区一帯であるが、明治時代は勝原村、大津村、旭陽村であった。当時の海岸線は現在よりも内陸に入り込む。本里は、もとは「大宮里」「大宅里」と2回の改称が記される。大宮は品太天皇が宮をこの村に創ったためであり、遺称地が宮田、宮内地名に残るほか、その大宮とは魚吹八幡神社と思われる。私見では、「勝部岡」と号す「大法山」を勝原東方の京見山に比定している。「上筥岡」と「下筥岡」は京見山の南裾にあった小山と箱山と呼ばれる二つの小丘であり、「杣田」は箱山付近の小字に、「与富等」は丁（よろ）地名に残されている。

里の範囲としては、北は檀特山から京見山北辺まで、西は大津茂川の流れる魚吹八幡神社付近ま

で、東は飾磨郡と揖保郡の郡境表示が残る熊見・小阪あたりを限りとしよう。

丁地域および京見山一帯には、かつて 100 基を超える後期古墳があったとされているが、現在はほとんど消滅してしまい、ここでは 25 基をあげるにすぎない。薬司古墳と丁山頂古墳が各 1、山戸古墳群 16、丁古墳群 2、勝山町古墳群 5 が現状の内訳である。古墳破壊の経緯から、数や名称は混乱をきたしており、『姫路市史』では丁古墳群として 16 基を掲載しているが、これらは上記古墳群のいずれかに属する古墳である。群中には組合せ式家形石棺を内蔵する横穴式石室墳もある。

なお、丁山頂古墳は渡来系の初期横穴式石室を内蔵しているほか、本里で特筆すべきは 3 基の後期前方後円墳が存在することである。すなわち、山戸 12 号墳と薬司古墳（丁薬司古墳）、さらに丁山 1 号墳で、いずれも 6 世紀半ばの時期を考えられている〔中濱 2010〕。3 基もの後期前方後円墳が築造されている里は郡内でもここだけである。なお、古墳は比較的濃密であるが、北接して下太田廃寺が位置することを除けば、古代寺院の存在は知られていない。

（11）大田里

大田里は揖保郡南半部の東端、大津茂川が内部を南流する。風土記の記載順では、枚方里の次に記されるべきであるが、一旦南の大家里に下ってから大田里へ返るという順序になっている。現在では一部姫路市を含むが、揖保郡太子町太田一帯を指す。明治時代の太田村であり、太田、上太田、下太田などの地名が残る。

大田の名は、渡来人である呉勝がまずは紀伊国名草郡大田村に住み、うち一部の人々が摂津国三島賀美郡大田村に移住し、その後に揖保郡へ来たからだ、と風土記は記している。本条内の「言拳阜」「鼓山」とともに遺称地は不明であるが、鼓ヶ原という地名が残っている。

里の範囲としては、大津茂川に沿う形で南北に長い地理的まとまりがある。北は太子町上太田付近まで、西は枚方里と抵触しない範囲で檀特山まで、南は大家里の「大法山」と比定する京見山まで、東は太田原および山田峠までと、ほぼ領域の推定が可能である。

本里の後期古墳は 85 基を数える。内訳は沼田古墳、原北町古墳、黒岡神社古墳が各 1、内山戸古墳群 4、上太田古墳群 3、黒岡古墳群 13、天神山古墳群 8、郷ノ谷古墳群 6、北山古墳群 6、山田大山古墳群 8、山田古墳群 15、白毛古墳群 13、塚村古墳群 6 である。分布状態からするともう少し数は増える可能性がある。大規模群集墳はないが、小規模な群集墳が散在する特徴がある。黒岡神社古墳は組合せ式家形石棺を内蔵するほか、内山戸古墳群、山田古墳群、白毛古墳群は終末期古墳を含み、白毛古墳群などは横口式石槨系の石室を有している〔中濱 2002〕。

この里の南端、大家里と接するあたりに下太田廃寺がある。発掘調査によって、南面する四天王寺式の伽藍配置が判明した。南から塔、金堂、講堂が並び、回廊と築地塀を有し、寺域は四辺 100 m 以上の大規模なものである。これまでの里で述べてきた小規模な寺院とは一線を画する本格的な寺院である。出土した瓦は、法隆寺式系統下の細線鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦を創建瓦と考え、7 世紀後半に成立し、9 世紀後半まで存続したとされている〔大谷 2010、今里 2010〕。なお、下太田廃寺と同系の瓦が大阪府茨木市の太田廃寺から出土する。摂津から来た呉勝一派を記した風土記の記述と整合的であり〔今里 1995〕、その記載の信憑性を高めている。

(12) 石海里

石海里は瀬戸内海に面する揖保郡南端の里である。たつの市御津町、姫路市網干区・余部区、揖保郡太子町南部一帯、揖保川河口部の海浜地帯を含んでいる。明治時代の旭陽村、石海村、余部村、御津村である。海岸線は現在よりかなり内陸まで入り込んでいるため、生活圏は意外と狭い里ではないかと思われる。御津町には中島、碓岩、伊津など海と関係する地名が残り、姫路市にも津市場、魚吹、太子町では船代、沖代などの地名が残る。遺称地としては石海村、岩見、岩見構などがある。

風土記は、里名の由来に石海の人夫を使って土地を開墾した伝承を記す。また、「宇須伎津」は魚吹（うすき）八幡神社、「伊都村」は御津町伊津、「雀島」は綾部山の海中にある四十四島を雀島とも伝え、それぞれ比定できる。

里の範囲としては、北部を枚方里と荻原里、東を大家里に囲まれているため、それらの里と境界的整合性を保つ必要がある。明治時代の石海村を中心として、林田川と揖保川の合流地点付近から北限は立岡山まで、東は姫路市網干区以西までを範囲としたい。南部は御津町のほぼ全域を含み、浦上里との丘陵稜線が境界となろう。

本里は海岸線が入り込み、平野部に乏しい印象を受けるが、御津町一帯の山塊各所には後期古墳が全山にわたって分布する。その数は233基、揖保郡内の里では最大である。調査を徹底すればさらにその数は増加することを予測する。また、小丸山古墳と権現山59号墳は6世紀半ばの前方後円墳であるが、小丸山古墳では横穴式石室を前方部と後円部に内蔵する。

群集墳の内訳は、権現山古墳群が98、碓岩馬道古墳群46、碓岩菰田荒谷古墳群14、碓岩北山古墳群39、朝臣古墳群2、綾部山古墳群17、岩見北山古墳群15を数えることができる。古墳の密集度、築造数は尋常ではない印象を受ける。特に権現山山塊の古墳群は、小丸山古墳や権現山59号墳の築造を端緒として、おおむね東から西へ築造が遷移したようで、権現山一帯に展開する。さらに、西部の碓岩地区、碓岩馬道・碓岩北山古墳群などは小型の墳丘が無数に見られ、終末期の様相を示す石室も多い〔芝・中溝1997〕。およそ一つの里に居住した人間集団だけがこれらの古墳を築造したとは思えない数である。

これだけの古墳を造営する背景となる集落遺跡は知られていない。なお、時代の下る事柄であるが、姫路市網干区高田遺跡では9世紀代の古瓦が出土している。この瓦は石海里で操業された碓岩南山瓦窯から供給されたものである〔今里1995〕。遺構が不詳なため積極的に寺院として位置づけられていないが、ここでは高田廃寺と称しておこう。

(13) 浦上里

浦上里は揖保郡南西部の細長い谷地形を指し、明治時代は河内村であった。里の南に位置する家島諸島を含み、海上を含めると非常に大きくなる里である。風土記は飾磨郡でも家島諸島を記述しており、当時の海上郡界は当然ながら存在しない。本里はたつの市揖保川町南部、浦部を遺称地とするが、海浜部は同市御津町であり、家島諸島は姫路市家島町である。

浦上里名の由来として、阿曇連百足が難波の浦上からやって来たからと記されている。「御津」は現在の御津町岩見または伊津を指し、「室原泊」は室津、「白貝浦」は大浦である。「韓荷島」は室津

沖に沖ノ唐荷，中ノ唐荷，地ノ唐荷の3島がある。家島は現在の家島諸島であるが，「神島」は上島で，浦上里から見れば瀬戸内海のはるか南東，旧飾磨郡の沖，むしろ旧印南郡に近い。上島には風土記のとおり，「石神＝形仏像」に似た巨石がある。「高島」は家島諸島の西島と考えられており，島の南には「韓浜」と呼ぶ渡来人の墓地があることを記す。確かに西島の南浜にはマルトバ古墳群と呼ばれる積石塚の群集墳がある。

里の範囲として，陸上は揖保川町河内谷と呼ばれる地区である。海上の家島諸島を浦上里で詳しく記していることに意味があると考えるべきで，天然の良港である室津が海と陸の交通結節点として風土記の当時から当里に意識されていたことを示唆する。家島諸島を縫うように走る海上交通路は，上陸ないし寄港地として室津を目指したため，浦上里に含めて記載されたのであろう。室津は摂播五泊の一つであり，平清盛の寄港，近世には西国大名参勤交代の上陸港，オランダ商館長や朝鮮通信使の寄港や上陸など，古代から重要視された港であった。

本里では後期古墳が44基ある。狭隘な河内谷には後期前方後円墳として金剛山6号墳と無駕恵2号墳の2基が知られ，両墳とも6世紀半ばの築造である。その他，伝城山古墳，馬場奥山古墳が各1，宝記山古墳群4，金剛山古墳群7，権現山梶山古墳群20，馬場前山古墳群5，袋尻浅谷古墳群4を数える。中でも馬場前山古墳群は瀬戸内海の「御津」から上陸した峠越えに位置し，渡来系の石室構造を残している。また，金剛山21号墳は谷の北側山頂に位置する方墳で，7世紀後半の終末期古墳と考えられている。

ところで，浦上里に属する家島諸島にも25基の後期古墳をあげる。マルトバ古墳群が積石塚で20基（30数基とも），チンカンドー古墳には家形石棺を保有するなど重要な事例を含む。各島に数基の古墳が散在するようであるが，実態がほとんど不明であるため，詳しい検討ができない。

本里の寺院として，金剛山廃寺が著名である。発掘調査はなされていないが，法隆寺・川原寺系統の面違い鋸齒文縁複弁蓮華文軒丸瓦が創建瓦に位置づけられている。瓦型式から7世紀後半に創建され，9世紀前半まで存続した寺院である〔今里1995〕。阿曇連百足等の移住記事から，寺院の檀越として阿曇氏をあてる説が有力である。海人族である阿曇氏が浦上里の地域勢力となり，瀬戸内海を舞台に活動したことによって，家島諸島は浦上里に属する認識になったのではないだろうか。

（14）萩原里

萩原里は揖保郡南部の中央付近に位置し，たつの市揖保町や太子町の一部を含む。揖保町萩原を遺称地とする。萩原里については，ほとんどの文献が「萩原里」としているが，原典にしたがって萩原里とする。萩原には萩原神社があり，「針間井」伝承地としての井戸を現在も祀る。神功皇后の寄港地と風土記は記すが，当時の海がこのあたりまで入り込んでいた証左であろう。「萩原」以外の地名，「韓清水」「酒田」「陰絶田」「鈴喫岡」などははっきりしない。ただ，「傾田」に関しては，菅田町片吹に比定できよう。

里の範囲としては，林田川と揖保川の合流点から北，広山里までの細長い形状と思われる。一帯が揖保川の氾濫原として沖積平野であるため，幾筋もの流路が複雑に南流したようだ。その間を縫うように自然堤防が南北に長く形成され，そこに村が形成されているのだろう。しかし，『和名抄』の郷名に「萩原」はもはや登場せず，自然基盤が不安定な里として再編の対象となったのであろう。

本里では、揖保郡太子町の常全において終末期の石室が1基知られている。揖保川氾濫原の真っ只中の平野部で、しかも埋没した形でこうした未知の古墳が発見されることは注意されてよい。しかし、多数の古墳を想定することまでは不可能であろう。

(15) 少宅里

少宅里は揖保郡中央部、やや東寄りにある。たつの市龍野町のうち小宅地区を遺称地とし、明治時代は小宅村であった。古代山陽道が東西に敷設され、槻坂の峠を東に越えると邑智里である。もとは漢部里と称されたが、現里名は少宅秦公という人の名にちなむ。本里では、川原若狭という人物が登場し、若狭の孫である智麻呂が里長となった庚寅（690）年に少宅里とした、とかなり具体的な里の成立事情が記されている。

川の名として「細螺川」が記されるが、里を南流する林田川が比定されている。

里の範囲としては、北は上岡里の「殿岡」以南まで、東は邑智里との境界である槻坂まで、南は広山里との境界付近にある少宅神社を限りとしたい。西については明確ではないが、当時の揖保川が数条の流路からなっていたとしても、日下部里南限付近の本流あたりまでと推測しておこう。

本里の後期古墳は4基を数えるにすぎない。中井古墳群2、片山古墳と片山東山2号墳である。多少の増加は見込めるが、古墳数が少ないことは動かない。中井古墳群は発掘調査を受け、2号墳の石室は全長11.1mと確定している。少宅里での少ない古墳であるが、揖保郡内で最大級の規模を誇ることは見直されてよい。遺物では1号墳に三累環頭大刀、2号墳に頭椎大刀と、相次いで造られた古墳がいずれも装飾大刀を保有する点は興味深いものがある。

寺院として中井廃寺が著名で、山陽道北側の山裾に位置している。柱礎石や心礎のほか、石造露盤なども現地に残されている。瓦は珍しい鬼面文瓦や蓮華文帯鴟尾に加え、創建瓦として面違鋸齒文縁六葉蓮華文軒瓦などが指摘されている。寺院は7世紀後半に創建され、9世紀まで存続したもので、瓦文様は渡来系色彩が強い。漢部里と称していた前史がうかがわれる。また、690年に少宅里とした記事を重視して、中井廃寺の檀越は里長となった智麻呂と推定〔今里1984〕されている。

(16) 揖保里

揖保里は揖保郡の中心部、南西よりに位置する里である。揖保里の遺称地は揖保川町、揖保町に残り、明治時代は揖保村、半田村、神部村であった。とにかく本里は、揖保郡という郡名を背負う中心里であることは重視される。

このことについて、本里の比定地として揖保村に矮小化せず、かなり大きな領域と機能を考えるべく再検討〔岸本2009〕を加えたところである。揖保地名の由来となった「粒丘」「粒山」に関しては、定説化していた揖保村の中臣山ではなく、龍野町西部の白鷺山または台山に比定し、『延喜式』神名帳の揖保郡明神大社である粒坐神社の故地との整合を追究した。「神山」に関しても神戸北山説があるが、中臣印達神社が位置する中臣山を考慮できる可能性も出てきた。

里の範囲としては、たつの市揖保川町の北部一帯と相生市の一部、さらに揖保町の大半、龍野町の南端部までである。北は日下部里との関係で、龍野町の白鷺山を越えることはなく、揖西町東端部の小神までを含むと推定している。北東部は少宅里や広山里の西限に抵触しない範囲で、揖保川

の本流までであろう。南東部は旧揖保村を二分して萩原里を残した西半まで、南西部は旧神部村全体を含む。西限は赤穂郡坂越郷との境界、つまり現在の相生市境付近までとしたい。北西部は出水里と桑原里が控えているので、旧神部村と半田村の北西部に横たわる養久山丘陵を境界とするほかない。

本里の後期古墳は 60 基を数える。分布状態は里全体に広く散開し、黍田古墳群にやや集中がみられる。そのうち、西宮山古墳と養久山 19 号墳が前方後円墳であり、他の後期前方後円墳と同様に 6 世紀半ばの時期と推定される。この 2 基の築造場所は離れており、異なる集団を背景とした築造と推定する。その他の内訳は、狐塚古墳、二塚 1 号墳が各 1、半田山古墳群 2、白鷺山古墳群 2、赤山古墳群 2、鳥坂古墳群 2、火打山古墳群 2、表山古墳群 3、黍田中山古墳群 7、黍田古墳群 22、山津屋古墳群 14 である。西宮山古墳の後継が大型横穴式石室を構築する狐塚古墳であろう。

狐塚古墳は径約 20 m の円墳で、横穴式石室は全長約 10 m を測り、郡内有数の規模を誇る。7 世紀初頭の築造と考えられ、しばしば近在の西宮山古墳と小神廃寺との権力系譜を指摘される古墳である。また、黍田古墳群のうちで、15 号墳は金銅製の双龍環頭大刀を保有しており、被葬者の特別な地位を推定させる副葬品である。

本里の北端を山陽道が東西に通過し、北側の山裾に小神廃寺が位置する。約 1 町四方と推定される寺域に、塔と金堂および講堂を配置する伽藍配置が考えられ、川原寺系統の鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦や重弁九葉蓮華文軒丸瓦などから、中央との関係が深い大規模寺院である。飛鳥様式瓦の出土を錯誤としておけば、時期的には 7 世紀後半に創建され、9 世紀前半まで存続した寺院である。

なお、小神廃寺から山陽道を挟んで南側には、小神芦原遺跡と小神辻の堂遺跡が広がっている。8・9 世紀に属する数多くの掘立柱建物群が発掘され、揖保郡内における同時代の建物数と遺跡面積では最大の集落となる。この集落は山陽道沿線に位置し、西宮山古墳や小神廃寺などの有力系譜近傍に展開、方位を意識した建物群であるため、揖保郡衙に関連する遺跡であることはほぼ疑いない。

以上の実態は、揖保里が名実ともに郡名を名乗る中心里であることとよく整合している。

(17) 出水里

出水里は揖保郡中央部、西よりに位置する南北に細長い里である。遺称地としてたつの市揖西町清水があり、明治時代の平井村である。「美奈志川」の記述において、越部里との水争いが詳しく紹介されており、そのとおりの塞き止め堤防が城山（亀山）尾根に残されていることも興味深い。おそらく亀池の水を争った伝承であり、出水里の北端がここまで意識されていたことを物語る。なお、広山里条で「泉里の波多為社」と記された社は、本里の祝田神社で疑いない。

里の範囲として、北は先述のように「美奈志川」＝中垣内川をさかのぼる城山尾根まで、東は揖保里に比定した揖保川町半田および揖西町小神の手前までであろう。南は揖保里との境界である養久山丘陵、西は桑原里との境である揖西町新宮・竹万・北山付近までと推定する。なお、『和名抄』の郷名に出水は残されなかった。

本里の後期古墳は 212 基を数える。特筆すべきは重蓮寺古墳群の 145 基であり、丘陵斜面の谷地形に密集する大規模な後期～終末期古墳群が知られている。その他の内訳は、台山古墳群 4、小神

古墳群 26, 景雲寺古墳群 4, 中垣内古墳群 30, 中垣内天神山 6 号墳, 新宮東山古墳群 2 である。重蓮寺古墳群をはじめ, 小神, 中垣内という中規模以上の群集墳が 3 カ所に知られる点で, かなり有力な里にみえる。中垣内古墳群内の中垣内 1 号墳は, 約 30 基の群集墳を率いる盟主墳とされ, 本墳は群集墳に埋没していることが特徴である。古墳は径約 17 m の円墳, 横穴式石室の全長は約 10 m, 天神山 1 号墳や狐塚古墳と比肩する勢威を誇り, 時期は 7 世紀初頭である。なお, 中垣内・重蓮寺・小神など各群集墳の実態は, 詳しく調べることで数は増加し, 分布からみれば明らかに墓域が定められていることが看取される。

本里も山陽道が東西に貫通するが, その北側に中垣内廃寺が位置する。現在は恩徳寺の境内と重なり、礎石や心礎が現存する。従来は 8 世紀以降の寺院とされていたが, 最近になって蓮華文帯鴟尾片なども採集されたと報じられ, 7 世紀にさかのぼる可能性が高くなった。

(18) 桑原里

桑原里は揖保郡中央部における西端の里, 揖保郡条で最後に記される里である。明治時代は桑原村と布施村と呼ばれ, たつの市揖西町西部を比定できる。風土記では, もとの名は「倉見里」と記し, 槻折山(邑智里記載)で品太天皇が本里までを見通して倉が見えたから, という地名由来を記している。いま一つの伝承として, 讃容郡の桜を桑原村主が盗んできて, 持ち主がこの村で見つけたから桜見, とともに記している。ちなみに, 里の北端山塊を大蔵山と呼ぶ。

「琴坂」は構と小犬丸の境にあって, 現在も琴坂と呼ばれている。名の由来は, 出雲人が娘の気を引こうとして琴を弾いたから, と記している。琴坂峠は古代山陽道の通過地点であり, 交通路と出雲人の関係が興味深い。桑原里は『和名抄』において「桑原」と「布勢」の 2 郷に分離しており, 新たに「布勢郷」が成立しているのは, 布勢駅家との関係が考えられる。

ところで, 「琴坂」では, 双六のサイコロに似た銅牙石があると記されているが, これに該当する正六面体の黄鉄鉱結晶が琴坂南方で多数確認されている。

里の範囲としては, 北は大蔵山, 南は揖保里との境界である養久山丘陵と土師, 南山あたりまで, 西は赤穂郡界となる光明山尾根をたどりたいと考えている。

本里の後期古墳は 23 基を数えている。10 基を数えるような群集墳はなく, 1 基ないし数基の後期古墳が里内の各所に散在しているのが特徴である。竹万 3 号墳, 住吉古墳, 長尾タイ山 1 号墳, 長尾薬師塚古墳, 播磨塚古墳は単独で存在する。その他, 北沢古墳群 4, 津原古墳群 2, 小犬丸中谷古墳群 2, 竹原古墳群 2, 龍子長山古墳群 2, 龍子向イ山古墳群 6 が内訳となる。

そのうち, 長尾タイ山 1 号墳は小古墳群内において最後に築造された古墳で, 石室は初期の横穴式石室と推定される。長尾薬師塚古墳は横口式石槨系の石室を内蔵する 7 世紀後半の終末期古墳で, 一辺 17 m の方墳である。その位置, 規模, 内容から, この時期の揖保郡内で最も傑出した古墳である。

播磨塚古墳は南西端の山塊尾根に築造された後期前方後円墳で, 6 世紀半ばの築造である。横穴式石室が 2 基, 前方部と後円部に構築されている。その山裾には 7 世紀前半の巨石墳で, この時期としては傑出した那波野古墳が存在する。ただし, これら 2 基の古墳は立地および石室の開口方向からみれば, 揖保里または「赤穂郡」にその領域が属する可能性がある。

本里も山陽道が東西に通る、琴坂峠を西へ下りたところに布勢駅家が置かれている。布勢駅家は発掘調査によって全容をうかがえるようになった。駅家の創始は 7 世紀後半に始まる掘立柱建物群と推定され、8 世紀後半に礎石瓦葺白壁赤塗りの駅家として増改築されている。

最近、布勢駅家の西隣に小犬丸中谷廃寺が発見された。瓦葺築地塀と塔が発掘され、約 1 町四方の寺域が推定されている。創建時期は出土瓦の検討によって、面違鋸歯文縁単弁十葉蓮華文軒丸瓦をさかのぼらせて 7 世紀末、廃絶は 9 世紀中ごろ〔別府ほか 2006〕とされている。ただし、今里幾次は創建時期を 8 世紀末以降と考えており、なお議論の余地を残している。

古代山陽道の敷設と布勢駅家の設置、有力な終末期古墳としての長尾薬師塚古墳、小犬丸中谷廃寺の創建など、里長と駅長、檀越といった権力系譜がうかがわれる。

③……………古墳被葬者と寺院の檀越

以上、揖保郡 18 里の地域の実態を素描し、加えて後期古墳と寺院について紹介してきた。小稿の意図するところは、郡里制の実態を分析することであり、それは 7 世紀における地域社会の史的变化を解明することでもある。そのため、まず本節では風土記に記された里を念頭に、後期古墳から導かれた築造集団と被葬者について考えてみたい。その上で、古代寺院の建立背景に言及を試みる。

これまで述べてきたように、各々の里にはかなりの後期古墳が知られている。里の成立を考える素材として後期古墳を扱うため、逆説的な方法かもしれないが里毎に古墳を把握する。萩原里のように 1 基しか知られていない里から、石海里のように 233 基もの古墳が数えられる里がある。いわゆる五十戸一里といった一定の人口を背景に里が設定されたものとすれば、厳密には同時代史料の比較ではないが、里毎で古墳数の差が大きすぎることは明らかである。古墳の不均等分布を風土記に記される里とどう関係づけられるかが課題となっている。

後期古墳が以前に比べて築造数が激増する一般的理解として、首長層に限られていた古墳の造営が、古代家族と呼ぶような家長単位まで拡大したためであると言われている。6 世紀後半から約 100 年間にわたる古墳を対象とすれば、少なくとも 3 世代が築造した古墳の累積を考えなければならない。古墳築造集団が 1 世紀にわたって固定的に一族を維持している保証はないが、地域社会の分析には 1 世代の抽出が必要であり、歴史的累積は排除する操作が求められる。したがって、3 基の古墳が 6 世紀後半から 7 世紀前半まで系譜的に築造したことが確実な古墳群の場合、1 基を造営する地域集団、すなわち古代家族が 3 世代にわたって営んだ古墳群とみなす必要がある。

以下、旧揖保郡における分析可能な個々の群集墳において、具体的に検討してみよう。

上笹古墳群(図 3 左上)

香山里内の揖保川左岸に位置する上笹古墳群では、尾根上の 1 基を除いて 14 基の古墳が知られている。分布状態から 1～10 号墳、11～13 号墳、14 号墳という大きく 3 支群に分けられる。さらに、1・2 号墳、3・4 号墳、5・6 号墳、7 号墳、8・9 号墳、10 号墳と、細かく小支群に分けられることも認識できる。そして全体で 9 家族による 1～2 世代の造墓の累積であるとし、古墳の規模差などから各家族間に較差が認められることが指摘されている〔中濱 2005〕。古墳の平面分布上のまとめりか

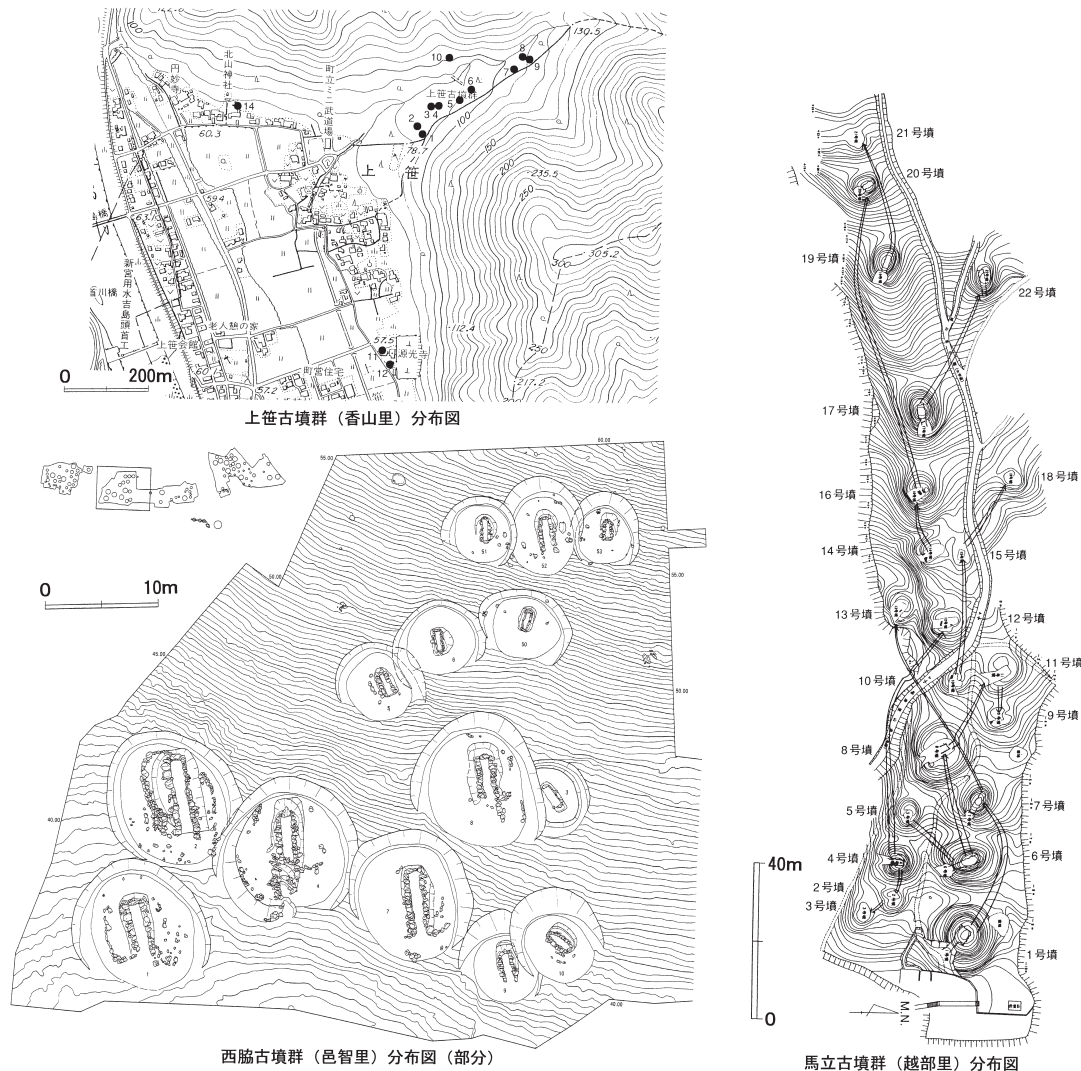


図3 群集墳と築造単位

らすれば、妥当な認識である。なお、これら9家族は一つの族制集団に属するとみて、族長がいるとすれば、規模と内容から7号墳の被葬者をあてられる可能性が高い。

馬立古墳群(図3右)

越部里内の馬立古墳群は、里内に複数存在するうちの一つの群集墳である。比較の実態が知られている22基の横穴式石室墳を分析する。石室の開口方向を6通りに分けて築造順序を考えた報告[松本2002]がある。すなわち、1→7→13号墳、5→6→8→11→9号墳、4→12号墳、2→3号墳、10→15→18号墳、14→16→20号墳、17→22号墳、19→21号墳である。群形成の端緒となった1号墳（姥塚古墳）から谷奥に向けて築造が展開すると想定される。ただ、石室開口方向に着目したため、位置関係にまとまりがない。しかし、2～5世代にわたって6～7家族が造墓したものであるという分析は、築造順や古墳の関係を組み替えたとしても、結果的に妥当な指摘ではないと思われる。

西脇古墳群(図3左下)

古墳群の大部分が7世紀初頭に造られはじめ、7世紀末に終息する終末期の群集墳である。総数約 100 基と推定される古墳のうち、92 基の発掘調査によって、100 年間を 4 期（細分含む）に分ける造墓の累積が判明している〔西口 1995〕。

大きな支群別の内部に、切り合いをとまなう一部の小支群が明瞭で、一見して密接な関係を持つ世代毎の古墳が系譜的、累代的に築造されたようにみえる。しかし、報告書ではこの小支群を累代的築造ではなく、複数家族による同時期の築造単位とみている。つまり、小支群とは墓域として 1 家族に与えられたものではなく、複数家族に与えられて古墳が順次築かれ、次の世代には新たな墓域へ家族ごと移動して造墓をおこなうと推定しているのである。この分析を肯定すれば、馬立古墳群の築造単位の順序と同じ検討結果が導き出されている。

後期古墳の被葬者

先にみたような群集墳のあり方は、後期古墳、特に横穴式石室墳の被葬者像を考える手がかりとなる。多くの考古学研究者はさまざまな言葉を使用しつつ、概して古代家族といった概念で横穴式石室墳を理解しようとしている〔広瀬 1978, 近藤 1983 など〕。後期古墳は群集墳を形成していることが多いが、その群集は族制的集団の紐帯を示していることはほぼ確かである。さらに、群集墳内部の古墳分布や築造順位から、支群となる小群の抽出や系譜的築造を観察できる場合がある。これらが古代家族の基礎的単位である各世帯またはその集合体としての世帯共同体を示し、さらには群集墳そのものが大小の族制的集団——すなわち血縁的氏族集団を示しているとみる。

なお、早くから水野正好は、群集墳や群構成が多様な形態を採るのは、墓域が家族、氏族、同族といった異なるレベルで設定され、時には集落単位でも設けられた可能性があるためだと指摘し、後期古墳の多様な築造状況を見通している〔水野 1970〕。確かに揖保郡内部の後期古墳や群集墳はまさにそうした存在形態を有している。

山中敏史も、群構成として小支群、支群、古墳群という規制を重視し、「血縁的・同族的関係の遠近を示す集団の単位」という族制的原理にもとづく造墓と説明〔山中 1986〕する。そして、世帯共同体を古墳造営の単位としているものの、「氏族的結合を離れては造墓活動が困難であった」とみて、造墓主体の自立よりも、なおも属する族制的規制を重視した。また古墳造営層を編戸の基礎的単位として想定する。

かつて筆者は長尾・小畑遺跡群と呼ばれる 6 世紀の集落と古墳群を分析した〔岸本 1999〕。揖保郡桑原里に位置するもので、完結した丘陵内部の複数遺跡（長尾谷遺跡、小畑荒神前遺跡、小畑十郎殿谷遺跡、小畑十郎殿谷南遺跡）において、6 世紀前半の約 50 年間に掘立柱建物と竪穴住居からなる約 7 単位の小家族体が 2 世代継続している。それら家族体の墓域となった長尾タイ山古墳群では、周溝墓状の約 7 基の小古墳が 2 世代にわたって続いている。つまり最小単位の家族体が小古墳の被葬者と対応させられる可能性が高いことに注目したのである。さらに重要な点は、6 世紀半ばになって、古墳群では 1 基の横穴式石室が築造されることである。この遺跡群では、最小単位となる家族体、すなわち単位世帯が複数集まって世帯共同体として機能し、それを 1 基の横穴式石室墳に対応

させることが可能な事例と考察したのである。以上を踏まえ、多様な家族や集団構成を想定しつつ単純化し、ここでは1基の横穴式石室を単位世帯の集合体である世帯共同体＝古代家族として記してみよう。古代家族に家長の存在を認め、その家長を横穴式石室、つまり後期古墳被葬者に該当させうることについては、一定の共通理解を得られよう。

このような考察を積み上げ、横穴式石室墳は一つの家族が造墓したものとするれば、10基の横穴式石室墳があれば10の家族を背景とする族制集団が考えられる。それが100年以上の時期幅をもつ古墳の累積なら、強引ではあるが、後期古墳は平均3世代程度の累積として数えたい。つまり一時期の地域社会における集団の内実、後期古墳総数に対して3割程度のものと試算する前提に立つ。1基しかない古墳も存在するし、明らかに2基で完結する古墳群、それ以上の数の古墳群もあるので、1世代のみで途絶える古墳や5世代にわたる長期造墓も考慮される。3割程度とする数値は、そうした振れ幅を認めた上での平均的な試算である。

この前提が許されるならば、例えば香山里は7カ所の古墳群に計56基であるから7群で約20家族、などと具体的な数値を示すことが可能となる。この数値はそのまま家族体——つまり戸を基礎とする族制的集団の数と規模を反映したものともみなしてよいだろう。

以下、18里内部の家族集団について列挙すると、後掲表3のとおりとなる。

里内部の古墳数からみると、その族制的集団も大小多様で、家族の数も1～90まで、実にさまざまである。古墳の数も増えることが予想され、仮説的な試算とはいえ、50戸といった均等な実態を示していないことは確かである。ただ、現実の古墳数を反映させたものであるから、一定の実態を示している点は認めておきたい。いったい、このような不均等な人口基盤の里内部で、五十戸といった編戸が成り立つのか、あるいは実態として里の編成はありえたのであろうか。この点については、次節4で検討することとしたい。

後期の有力古墳(図4・5)

次に、突出した規模や内容を示す古墳について言及したい。それは族制的集団の中の盟主墳、複数集団をまとめた一定地域に君臨する被葬者を想定できる事例である。

まず、6世紀半ばの前方後円墳である(図4)。前方後円墳は成立当初から特別な古墳であるが、6世紀には規模を縮小しながらも揖保郡内に計11基が知られている。すなわち枚方里に1基、大家里に3基、石海里に2基、浦上里に2基、揖保里に2基、桑原里に1基、である。里内部に前方後円墳を擁するのは6里、そのうち4里に複数の前方後円墳が築造されている。2基が築かれる例が多いが、これが二つの族制的集団を基礎とした並立なのか、首長権を継承した系譜的築造なのかは意見が分かれるところであろう。個別地域の事情を考慮して、私案ではそのどちらの場合もあり得ると考えている。ただ、後期前方後円墳が後代の里領域と対応しないことだけは確かである。分布は揖保郡南部に偏在しており、官道である山陽道や美作道と関連している様相もない。

風土記から150年も前、族制の原理の時代に王権と関係を結んだ有力首長層がそれぞれの権力を背景に前方後円墳を築造したのであろう。仮に古墳の築造位置が、後代の里と合致してもそれは規定的なものではなく、領域とは別の偶発的なものとみたい。数においても分布においても、揖保郡18里という地域領域と整合的ではないからである。ただ、大きな格差を持たない後期前方後円墳で

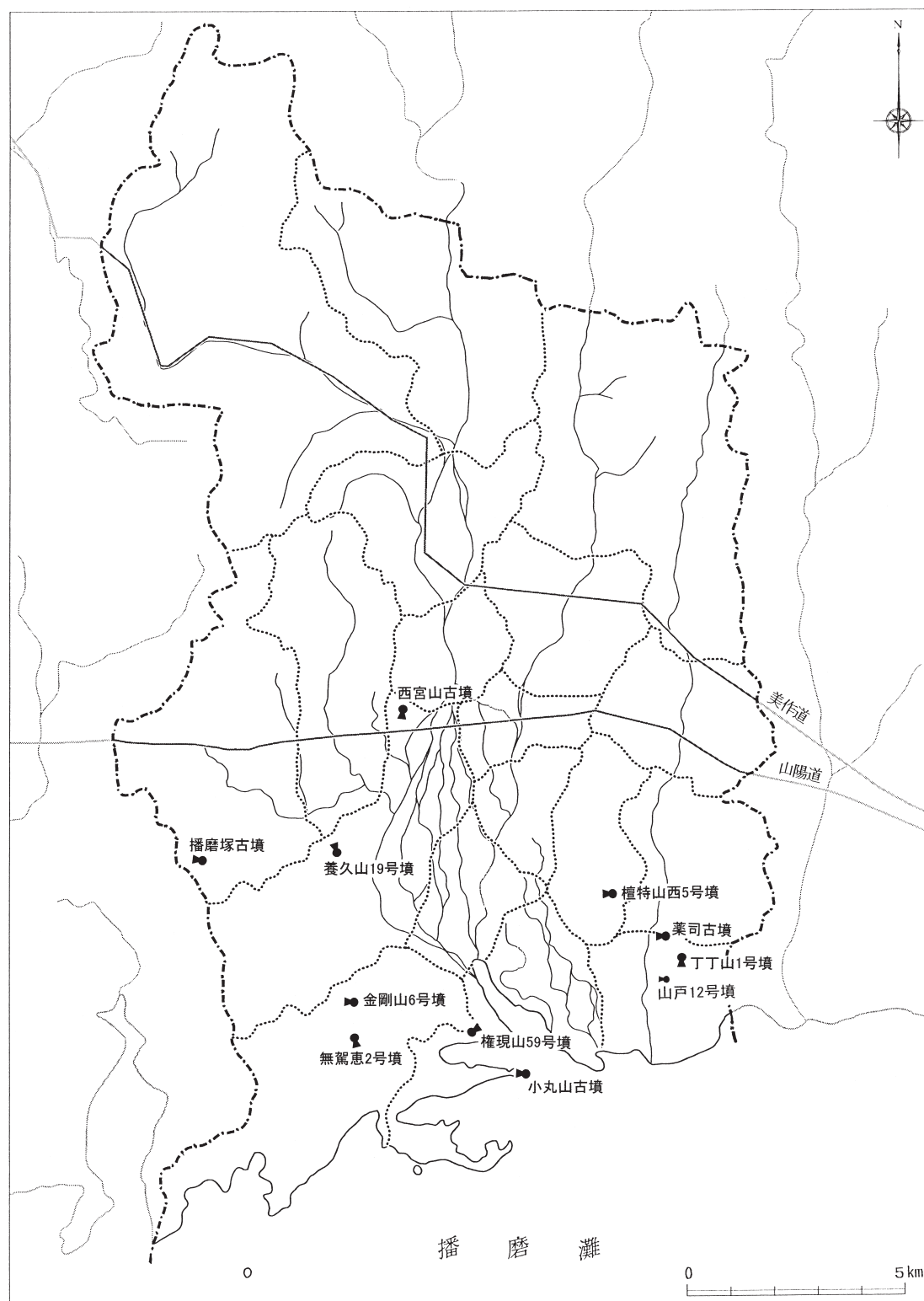


図4 後期前方後円墳の分布

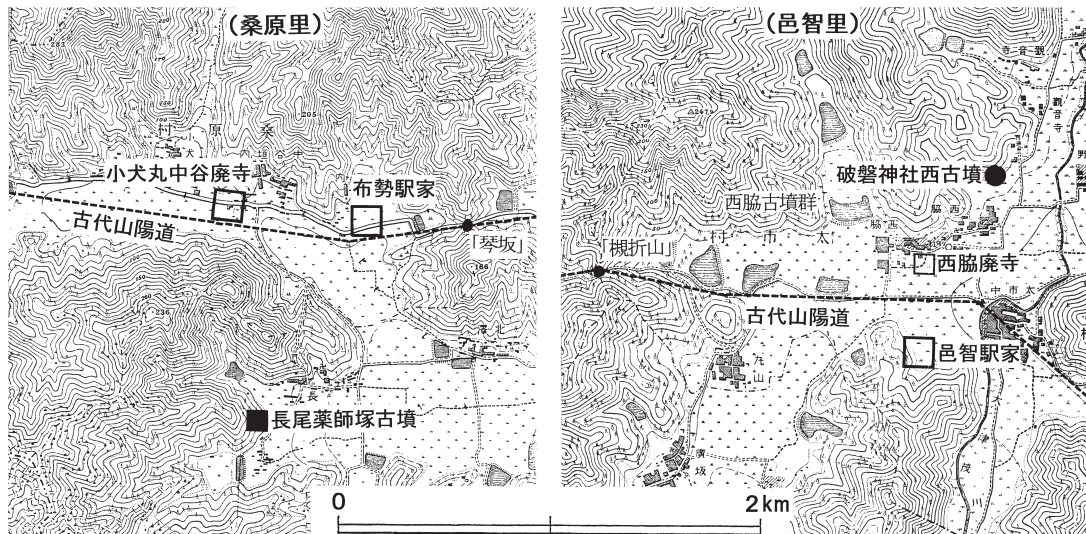


図6 終末期古墳・山陽道・駅家・寺院

ちょう塚古墳群の族長であるのみならず、里全体でも最高位の古墳である。まさに越部里長の墓であつてもなら不思議はない（図5左上）。

邑智里では、破磐神社西古墳が他を圧倒している。小石を補っているが、玄室は1枚の巨石を使って構築することを意識している。石室の全長は8mを超えており、7世紀後半の時期が考えられているが、終末期の巨石墳として突出した規模を誇る〔中濱2005〕。風土記が本里を邑智駅家と記すように、駅家の設置と連動した里の成立は、この古墳被葬者の性格を推し量ることができる。西脇古墳群などの大群集墳を離れて孤高を誇る本墳は、邑智里長であり、邑智駅長をも兼務する人物の墓と考えて異論はなかろう（図5左下）。

桑原里には長尾薬師塚古墳がある。東を向いて遠くは揖保里までを一望できる山の斜面に選地した一辺約17mの方墳である。前面には段状加工がなされている可能性があり、後面は弧を描く溝状の整形がなされている。石材は切石を意識した加工をおこなう横口式石槨系の石室で、7世紀後半の時期が考えられている〔岸本・中濱・成瀬2001〕。横口式石槨系の石室は、揖保郡においては少ない事例であり、本墳の内容は特別である。7世紀前半までの横穴式石室の構造系譜とは異なるし、石室の全長で比較していた古墳の優劣とも異なる歴史的評価が必要な古墳である。時期的には7世紀末まで下らせることも考慮できる。古墳のすぐ北には山陽道が通り、布勢駅家が置かれている。小犬丸中谷廃寺の建立が7世紀にさかのぼるなら、被葬者は桑原里長＝布勢駅長＝寺院檀越という要職兼務の被葬者がみえてくる（図5右）。

以上のように、揖保郡内には7世紀後半の有力古墳がある。それらは群集墳に埋没しているものと、群集墳を離れて単独で存在するものの2者がある。7世紀前半の群集墳の中にも、族長と目される香山1号墳や天神山1号墳、上笹7号墳があり、孤立的に存在する中井2号墳や狐塚古墳もある。群集墳は7世紀半ばまでに盛期を過ぎてしまうが、7世紀後半の古墳を特に終末期古墳と呼ぼう。

これら終末期古墳は数も限定されている。はっちょう塚7号墳のように群集墳内部で突出した被

葬者も存在する。いっぽう、群集墳に埋没しない破磐神社西古墳や長尾薬師塚古墳は名実ともに最後の、しかも孤高の有力墳である。従来の族制的原理が併存しながらも、他方で群集墳から飛び出し、単独で傑出した古墳を造営することは、その被葬者が郡（評）を意識する身分的位置を獲得しているとみえなくもない。7世紀後半はすでに評制が機能しはじめている時代である。長尾薬師塚古墳のような終末期古墳は揖保郡内にも並び立つ例がない。切石を意識した1棺埋葬を前提とし、しかも墳丘規模が大きな長尾薬師塚古墳は、薄葬の風が吹きはじめた古墳時代末期、揖保郡内でも特別な人物の墓である可能性が高い。

大胆な見解を示せば、大宝令成立以前のことはあるが、郡の「大領、少領、主政、主計」といった郡司四等官は、7世紀後半の評段階で地方官人として地位が確立し、終末期古墳によってその存在がうかがわれるのではないか。揖保郡においては、前史にミヤケ設置がなされた越部里にはちょう塚7号墳、邑智里に破磐神社西古墳、桑原里に長尾薬師塚古墳が登場する。特に後者の2里は山陽道駅家の置かれる里であり、彼らが里長でもありながら郡司層を兼務する地位を得る契機が、国家の威信をかけた山陽道の建設と駅家経営であったことと無縁ではあるまい（図6）。こうして7世紀後半の終末期古墳の時代になって、はじめて郡単位の地域社会が古墳にみえてきたと考えられよう。

古代寺院と18里

次に古代寺院の実態を考えてみる。すでに紹介したように、揖保郡では18里のうち、13里に古代寺院が知られている（表1、図7）。そのうち、7世紀に成立する寺院は9カ寺にのぼり、半数の里に寺院が成立するのである。すなわち栗栖里の栗栖廃寺、越部里の越部廃寺、上岡里の奥村廃寺、大田里の下太田廃寺、浦上里の金剛山廃寺、少宅里の中井廃寺、揖保里の小神廃寺、出水里の中垣内廃寺、桑原里の小犬丸中谷廃寺である。8世紀以降に成立する寺院は、香山里の香山廃寺、林田里の山田廃寺と伊勢大池廃寺、邑智里の西脇廃寺、石海里の高田廃寺となる。

18里のうち13里に古代寺院があり、しかも7世紀後半段階で半数の里に寺院が建立されている。播磨国全体で寺院の数はかなり多いが、揖保郡の場合は特に目立っている。古代寺院の造営を可能にしたのは、仏教思想を受け入れる意識の広範な浸透であり、建築技術の伝習や労働力の結集である。その寺院建立を成し遂げた檀越として渡来氏族や有力氏族、里長や郡司層を結びつけた指摘はくり返し主張されてきている〔今里2003〕。確かに、揖保郡の場合は渡来人の記録が多い。漢部里と称した秦氏系統下で成立した中井廃寺、美作道沿いで渡来系統瓦を使用する奥村・越部・栗栖廃寺、中央から移住する渡来系氏族が関与した下太田廃寺や金剛山廃寺などがある。仏教寺院の建立は渡来氏族が携えてきた技術なくしては成功しなかったのである。

加えて仏・法・僧の一体的導入も必要な要素であり、建立する側の強い意図とともに、受容する地域の側も思想的な意識共有がなければ寺院の建立は困難であったと考えられる。有力氏族の集団移住などで必要な技術、物資、思想がまるごと伝えられた場合でも、風土記が林田里条で記しているように、衣縫猪手、漢人刀良等の祖は山の峯に居ます神に敬意を表し、社を山本に立てて敬い祭って以後、家々が平安を得て、遂に里を為すことを得た、と伝えている。これは在地神奉賛の例であるが、揖保郡では天日槍命など外来の集団が渡来し、地元との軋轢を記すことが多く、伝統的信仰

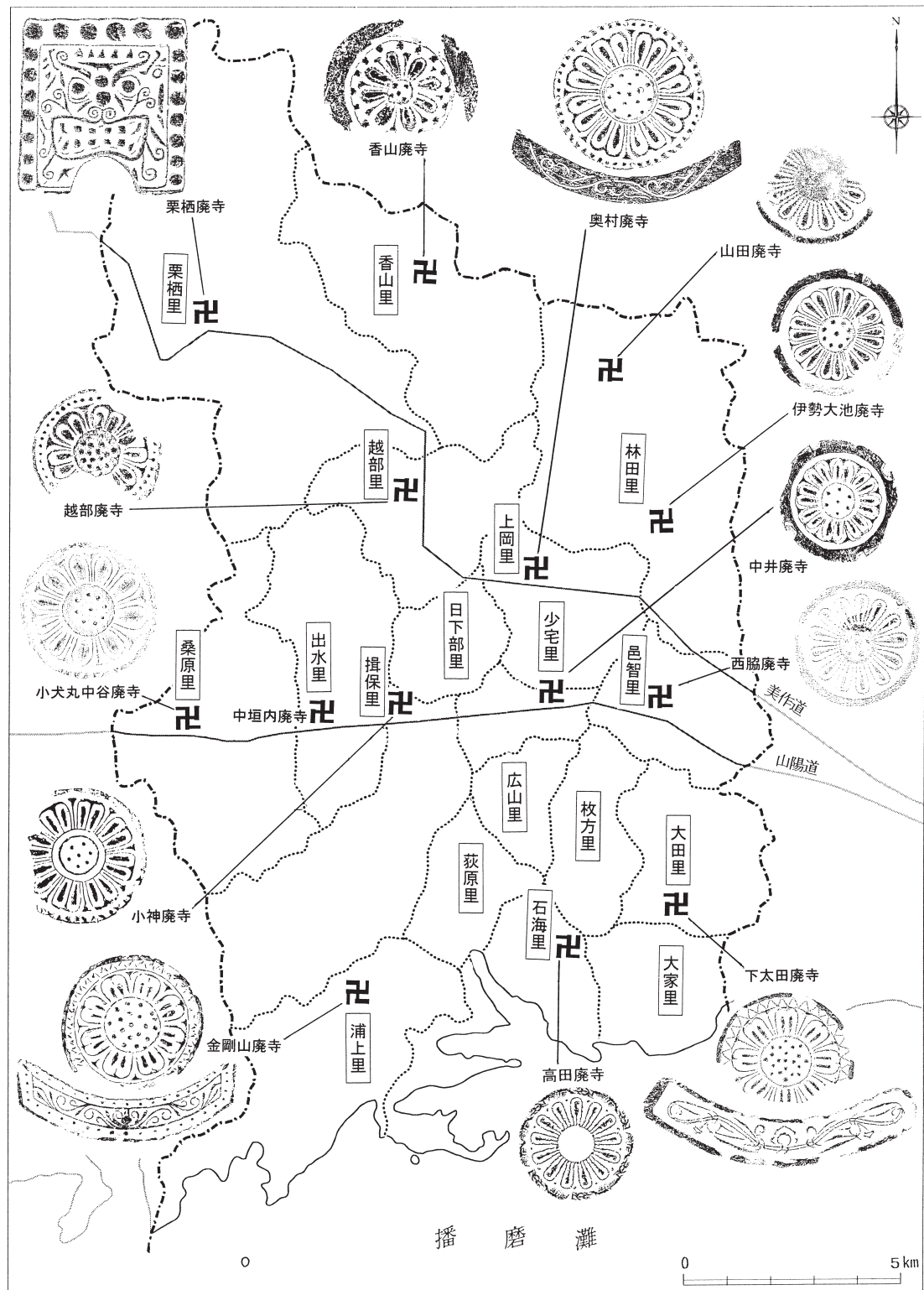


図7 揖保郡18里と古代寺院の相関

や在来神（地域権力）との融和は大きな課題であったに違いない。

ところで、揖保郡における半数以上の里に仏教寺院が普及するにあたっては、単に集団の移住にともなう民間層の普及活動だけでは説明が難しい。それも、氏族という族制的単位ではなく、大局的には里という地方制度的な単位で寺院が分布しているから、そこにはまた別の原理が働いていることも考慮すべきであろう。

7世紀以降の仏教普及について、孝徳朝から護国仏教への傾斜がみられ、持統朝になると国家が強く意識され、版図内にあまねく仏教を普及させる国家仏教の色彩が濃くなるのだという〔菱田2005〕。このような観点で揖保郡内の古代寺院を眺めると、寺院の規模に大小はあれど、1里1寺を目指したかのような構図がみえてくる。後代の郷に名を残すことなく廃里となった日下部里、枚方里、荻原里を除けば、郡内の里で現在のところ寺院が知られていないのは広山里と大家里のみである。

揖保郡里に建立された古代寺院は、里という単位が風土記の段階でかなり明確に区画されているかのように、1里1寺的な寺院造営が半数以上の里に実現していた。林田里では後代に2寺が成立するが、里内の村毎にも寺院が造営されることがあったのだろう。

後期古墳の分析では、墓という形で地域集団の存在を示さなかった里もあれば、複数の地域集団が各々の墓域を設けた里まで、較差が大きい。つまり集団の編成は里という形では読み取れないのである。しかし、寺院に関しては1里1寺が目指された可能性があるなら、それは里編成とかなり密接に連動する政治的な意図すら感じられる。すなわち仏事をなす族制的集団の領域に里が設けられたのではなく、里という別原理の領域に寺院檀越を編成し、その造営を奨励したと考えなければ、その合理的説明は難しい。つまり、天武朝以降に後期古墳築造が減少したことを踏まえ、古代寺院は有力古墳からの権力系譜の交代劇のように考えられてきた。しかし、実際はそのような単純なものではなく、すこぶる政治的な断層、地方制度の歴史的革新が背景にあったとみるべきなのである。

近年、地方寺院の成立に関して、単なる氏寺という捉え方だけではなく知識寺院説が唱えられてきた。檀越が造寺を実現するには、仏事遂行に際して必要な財物や労働を通じて結縁する知識の結集が必要である。7世紀後半寺院の爆発的増加を可能にした背景とは、公民制の施行という新しい地方の統括制度が浸透し、寺院造営には社会的結合を実現する知識結集の仕組みが内在しているというのである〔竹内2012〕。多分に郡を意識した考察であるが、聞くべき主張である。

また、播磨国では賀毛郡内でも11里に9寺院が知られている。今津勝紀は村単位の氏寺と考えているが、よりいっそう重要な指摘は、寺院の知識に着目し、針間国造の神話と系譜という族制的秩序で地域社会を説明するのは困難とみたことであろう。むしろ擬制を含めた血縁による編成から、地縁による編成へと地域社会の編成原理が転換しはじめることを、既多寺大智度論を用いて考察した。それは8世紀以前から進行していると主張する〔今津2003〕。

新たな発見が蓄積されてきた考古学上の古代寺院と、文献史学での研究に力を借り、揖保郡での古代寺院のあり方を考えると、7世紀後半における地方の基礎的単位と寺院の関係がみえてきた。つまり郡（評）のみならず、里といった地方の最小単位までを射程にした、きめ細かい領域区分の顕在化がうかがえよう。寺院の造営が里毎になされたことで、建立にあたっての檀越と知識の結集、仏事の継続的挙行による社会統合が持続的に求められる。このことは、氏族が集団移住するなどの

不安定な前提を排し、固定的に地域という土地に縛られた寺院経営を想定することとなる。それは里に対してほぼ均等に実現が目指された。まさにこの均等性こそが、古墳からは見出せない原理であり、里としての領域区画が族制的支配に優先した考古学的事象とみえるのである。

換言すれば、人ではなく土地、族ではなく領域といった原理による掌握の開始である。郡に比較して史料的制約から積極的には評価されてこなかった里単位に及んで、土地領域としての支配が貫徹しはじめているのではないだろうか。

以上を補強するものとして、郡内で美作道が中心部を通る4里にはすべて寺院が成立する。また山陽道が通された5里にもすべて寺院が造営され、しかも7世紀に建立される例が大半である。古代官道は7世紀後半に整備されはじめることは確実であり、この動きと連動した古代寺院の造営は、強固な地域社会の創出を仏教寺院による地縁によって成し遂げようとする意図があったのではないか。官道の建設と維持管理の必要性を重視した地域社会の強化、通行する者に里毎の寺院を見せつける意図が働いているようだ。官道は国郡を越えて敷設され、常に維持管理が求められるものであるから、国家という上位権力による地域社会の統制が必要であった。古代寺院の性格として、単に護国仏教の普及という側面だけではなく、地域社会の統合と族制的集団の地縁的結合の強化を実現するための建立奨励がなされた側面もありそうだ。逆に言えば、古代寺院こそ国郡里制の領域的支配の一端を語る考古資料の一つとなりえよう。

④……………里の領域と設定原理

これまで、揖保郡18里の領域比定とともに古墳や寺院の実態などを素描し、主に事実関係の紹介とその背景を探ってきた。後期前方後円墳や群集墳、後期有力墳は里という領域と整合せず、ほとんど里制の前史的基盤とはみなせないことがわかった。対して、古代寺院に関しては、里の設定と連動するかのような造営が想定されたのである。

では、里の領域設定はいかになされたのであろうか。一見して里比定からみえる領域面積の多寡は歴然としている。本節では、その点を考えてみたい。

まず、領域面積として大きいとか小さいといった曖昧な形容を排し、具体的な数値化を試みた。つまり、里の領域比定が可能な強みを生かし、実際の面積を算出したのである。ただ、複雑に入り組む山野河海を擁する揖保郡であるし、風土記に記された点を繋ぐ想定であり、細かい部分は不問とした面積であることは言うまでもない。

古代の行政区域については、郡評の領域について点のおよび線的な境界に加え、ゾーンとしての境界が想定されている〔門井2009〕。『古事記』成務段の「国国之堺」を定める記事、『日本書紀』成務5年の「則隔山河而分国県」、同大化2年の「定山河」などの記述があり、『常陸国風土記』における「郡郷境界 相続山河之峯谷」や『出雲国風土記』にも多数の記載がみられるところである。『播磨国風土記』においても、揖保郡から分割された宍禾郡の冒頭に、「国作り堅め了りて以後に、此の川・谷・尾を堺ひに巡行」とあり、一定の境界を定め、しかも巡検している記述がある。

こうしたことから、国郡レベルでの領域設定は当然意識されていた。しかし、その基礎的単位をなす里においては里堺、里界、里境などの言葉が史料にみえないため、里領域はあまり問題とされ

表2 揖保郡18里の領域面積と開発面積と古墳数

里名	領域面積 (km ²)	開発面積 (km ²)	地味	後期古墳 (基)
香山	19.75	5.50	7	56
栗栖	42.75	7.50	5	27
越部	12.50	5.75	5	186
上岡	10.25	6.50	6	71
日下部	5.75	3.25	5	4
林田	29.00	8.50	6	9
邑智	9.00	3.75	6	120
広山	5.75	5.00	4	45
枚方	7.50	5.50	4	25
大家	7.00	6.25	4	25
大田	9.25	4.75	4	85
石海	12.25	6.50	2	233
浦上	17.25	5.50	2	69
萩原	6.25	6.25	5	1
少宅	4.50	3.50	8	4
揖保	22.00	14.25	5	60
出水	15.25	6.50	5	212
桑原	24.00	6.75	4	23
計 (平均)	260.00 (14.44)	111.50 (6.19)	(5)	1255 (70)

可能な地形区域である。それは生産面積と呼び変えてもよい。よって高所や急な傾斜地を除き、山丘の平野部との傾斜変換点を追う形で面積を分割する。また、大河川である揖保川氾濫原は平野部であっても開発に適さない土地も多く、多少割り引く必要がある。加えて海岸線も同様であろう。そのあたりも考慮しながら数値化した一覧が表2である。

里の領域面積で最も大きいのは42.75 km²の栗栖里で、最も小さいのは4.5 km²の少宅里である。大きさでは29.00 km²の林田里が2位につけている。小さい里としては、日下部里や広山里、萩原里も6 km²前後で小さい。領域に関する里の面積にはかなり大きな差、バラツキがあると言えよう。差の大きな領域面積から言えることは、必ずしも全体領域の大小だけで里が決められたものではないということである。ちなみに18里全体の領域面積のうち、里面積の平均値は14.44 km²である。

そこで、開発領域も同様に数値化したところ、領域面積の大きかった栗栖里と林田里でも各々7.5 km²と8.5 km²となり、もともと小さかった少宅里では3.5 km²となった。日下部里と広山里および萩原里でも各々3.25 km²、5 km²、6.25 km²という数値が得られた。したがって、全体領域の面積差は里毎に大きかったが、開発面積の差はかなり縮小していることがわかってきた。全体面積で大差のあった栗栖里と萩原里でも各々7.50 km²と6.25 km²、大差のない面積となっている。開発領域が最も大きな里は、14.25 km²の揖保里、最小里は3.25 km²の日下部里である。この数値は全体面積の差と比べて、かなり圧縮された差になっているのである。

さて、開発面積の18里全体の平均値は、6.19 km²であった。実際、5～7 km²台の数値を示す里

てこなかった。ところが、揖保郡での里比定が可能な条件下では、風土記は自然条件や土地について記すことで里領域を意識しており、この問題に取り組む有効性を認められるだろう。

まず、国土地理院が発行した5万分の1を基礎とする明治時代の古地図を使用し、1 km²メッシュを設定して面積を算出することとした。その過程で、山が深いところや海が入り込んだところでは、とうていそれだけの集落が確保できない気づきがあり、単に総面積を算出するだけではなく、全体の領域面積とともに開発領域の面積を併せて試算することとした。

開発（生産）領域とは、居住可能地のほか、人が働きかける土地、つまり生産基盤となる可耕地や開発可

は、半数以上の12里に及んでいる。開発面積は、領域面積に比較して面積差は大きく縮小しており、おしなべて意図的な均等化が図られているとみたい。揖保里を除けば、すべての里が8.5 km²以下に設定されている事実は重視すべきであろう（図9）。

以上に関わって、林田里と上岡里について触れてみたい。上岡里は「本，林田里なり」と記すように、もともとは林田里に含まれ、風土記成立までに分離独立した里である。林田里と上岡里の領域面積を合算すると39.25 km²になり、もと林田里は栗栖里に次ぐ大きな面積を領有する里であった。もと林田里は開発面積においても、15 km²という揖保里を凌駕する面積を有していた。林田里と上岡里は分割されても開発面積が各々8.5 km²と6.5 km²である。こうした実態が判明し、分離しても2里の開発面積は均等を目指した平均値と同等か、それ以上となることが見込まれた。その結果、里の見直し過程で地方制度上の政治的判断が下され、すなわち林田里を分割して上岡里が誕生したと推定する。里の設定を開発面積から考える上で、解釈に値する事例とみる。

次に開発面積で最も大きい揖保里について考えてみたい。本里は領域面積もすでに広がった里であるが、14.25 km²という広大な開発面積を持っている。これは、やはり郡名を名乗る中心里としての勢威が背景にあるためであろう。揖保里は有力古墳と有力寺院、古代山陽道に揖保郡衙が営まれる里である。さらに『延喜式』神名帳記載の揖保郡7座のうち、式内社が4座（揖保坐天照神社、阿波庭神社、中臣印達神社、夜比良神社）も位置する里である。有力里としての機能や社会関係を維持するには、おそらく郡の舵取りも含め、それだけの人間集団とともに生産領域を保有する必要があったと考えてよいだろう。もっとも、里が郷に改名された8世紀前半には、神祇政策上の要請から揖保郷、中臣郷、神戸郷の3郷に分割される運命にある。

なお、風土記は土地の肥沃度について、「上の上」から「下の下」まで9等級に分けて律儀に記している。これも領域や開発に関わるとみて表に記しておいた。海浜の石海里と浦上里が最高位に近い2等級であるが、最下位は少宅里の8等級、平均は5等級で中程度となる。最高位の石海里は、孝徳天皇が開発して田を作ることを命じ、阿曇連太牟を遣わして石海の人夫を集めて開墾した、と風土記は記している。懇田によって開いた里であるから、里は土地に根ざしたものである。開発に従事する人々は移動・移住してきた者であるが、土地は動かない。動かない土地を開発して石海里となした伝承を素直に読めば、里の設定はもともと一定の領域、特に開発（生産）領域を認めて設定された事例とみるほかないであろう。

ところで、表2には各里の面積を数値化することに加え、後期古墳の数を加えておいた。この比較から、里領域や開発面積が古墳の築造数に相関していないことは明らかである。領域の大きな揖保里など、有力里においても古墳数が決して多くない。古墳数が最も多いのは石海里であり、次いで出水里である。小さな里では確かに古墳数も少ないが、里領域との有意な相関はほとんどみられないと判断してよい（図10）。

古墳の多い越部里では皇子代君としてミヤケを置き、国宰の上野大夫が卅戸を結んで里とした記述があり、実態は186基、63戸程度を想定する古墳数である。越部里ではミヤケの存在が一定の土地を前提に戸が結集された史的前提がある。ただ、一般的に古墳は墓としての性格を有し、人的支配あるいは族制的支配を確認する手段として造営された。その築造がすこぶる政治的な性格を帯びており、被葬者の本貫地に墓が造営されることは必ずしも証明されていないし、生活圏を離れて墓

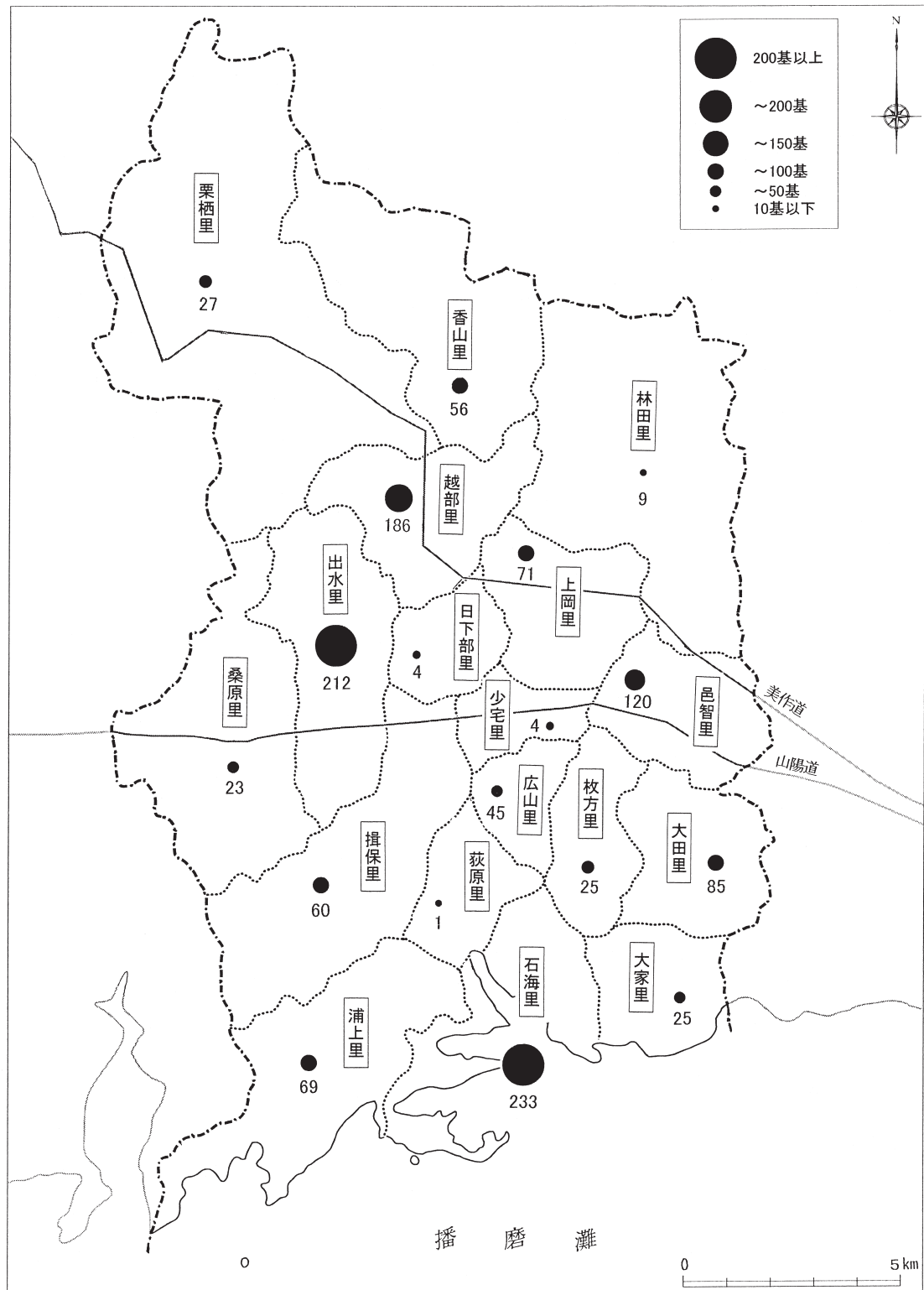


図8 損保郡18里と後期古墳の不相關

表3 揖保郡18里の古墳と家族(戸)数

里名	後期古墳 (基)	家族(戸)数
香山	56	20
栗栖	27	11
越部	186	63
上岡	71	26
日下部	4	2
林田	9	5
邑智	120	45
広山	45	18
枚方	25	11
大家	25	10
大田	85	31
石海	233	90
浦上	69	26
荻原	1	1
少宅	4	2
揖保	60	24
出水	212	74
桑原	23	15
計 (平均)	1255 (70)	474 (26)

域が設定される可能性もおおいにあり得るのである。風土記では、野見宿禰が旅の途中で日下部里に墓を造ったし、飾磨郡安相里の記述では但馬国造阿胡尼命が正骨を帰葬するという記事もみられる。すなわち、造墓や墓域設定には被葬者の意思を超えた上位意志が作用していることも考慮すべきである。古墳数の多い石海里は海浜部に位置することもあるし、同様に出水里も両隣里の共同墓域になっているともみえる。

こうした点をさらに踏み込んで考えるなら、古墳は移動する人や族制集団に付属し、しかも古墳の造営地は被葬者の本貫地とは限らない。郡(評)里などの地域区画は、懇田など土地開発領域に根ざした地方制度であり、古墳の示す領域・勢威と、里の示す領域は、人的領域と土地領域というまったく異なる原理が背景にあることを再度強調したい。したがって、里領域や規模が7世紀後半までの古墳築造と整合しない(図8)のは、当然といえば当然ではないだろうか。

前節で考えたように、横穴式石室を築く後期古墳を世帯共同体という家族に置き換えて「戸」とみた場合、1~2戸

程度の里から約90戸を推定できる里まであり、とうてい五十戸一里と呼べるような均等な地域社会を導き出せる実態をみることはできない。ほとんどの里が30戸以下の古墳数であり、50戸を満たすような里はわずかである。揖保郡全体で古墳を数えて戸数を割り出す試算では、全体で474戸、里の平均で26戸程度になる(表3)。

戸の編成について、1里で50人の仕丁や兵士を出す関係を考えるなら、古墳数でみる限り50人もの仕丁を出せる里は限られている。当時は多産多死型社会で出生時の平均余命は30歳前後、若年死による断片家族も多く発生、年齢差のある再婚も頻発し、流動性が高く不安定で過酷な社会であった[今津2007]と考えられている。里を結ぶ7世紀後半以降と、それ以前の古墳との相関は明瞭ではなく、理念的かつ制度としての地域社会と現実の実態的社会とは、かなり大きな懸隔があったとみるべきであろう。地域も異なる郡域の検討ではあるが、筑紫平野の国と郡境を古墳との関係で検討した片岡宏二も、古墳の数や規模からみる地域の権力構造と、郡の設定や耕地面積とは相関関係がないと分析[片岡2000]している。

以上、揖保郡18里の領域面積と開発面積の試算、後期古墳との相関を検討してきたが、里は開発面積を念頭にした人為的な設定がなされていることを推定した。里の領域面積の大きな差に対し、開発面積における一定の均等性がそれを物語る。中にはそれを目指して分割された里さえあった。他方、50戸という人的な編成について、後期古墳から導き出すことを試みたが成功しなかった。里の編成および領域設定と、古墳に表示される集団や造墓原理がおそらくまったく異なること、風土

記に記載された里と7世紀後半までの村落とも異なること、加えて理念的な地方支配制度と現実の実態には、やはり隔たりが大きいこともその理由として考えられよう。

⑤……………7世紀の地域史的画期

領域支配の成立過程

「前方後円墳国家」論を唱える広瀬和雄は、人的支配を基礎としながら国・郡・里という領域支配が実行された律令国家と古墳時代は、支配の原理が異なっていたという〔広瀬 2009〕。古墳時代の政治秩序は首長と首長、人と人との関係に基軸をおき、律令国家はそれを基礎にしながら土地を媒介にする領域的支配を実現していた。この異質な原理を繋ぐ史的叙述の論理として、異質なものに転換する契機や過程を分析・提示することができるか、これが小稿を起こす問題意識であった。

しかし、人的支配から領域的支配への転換に関する追究は、考古学の側からは少なかった。それは遺構や遺物といった考古資料の性格、独自の方法論による限界や研究者の嗜好も理由にあげられる。なお、律令国家成立過程の研究は主に文献史学からなされてきたが、その研究の蓄積は実に膨大なものがあって、残念ながら考古学側の私に逐一の検証はできなかった。

考古学の立場から7世紀の地域社会を描くにあたって、『播磨国風土記』を参照しながら国郡（評）里（50戸）制との対照を試みてきた。地方の一地域に視座を据え、細かい分析から導かれた領域的支配への転換を描く史的評価とは、次のようなものである。

風土記の記述における揖保郡の里は、まず土地の地味を最初に記し、里内の山、谷、川、地名由来などの風景を書いている。領域という意識は高いとみなすべきである。流動的な人の族制的編成下では、固定的な自然条件である領域をこれほど意識する必要はない。しかも、揖保郡における里領域は単なる領域区分ではなく、前節で検討したように開発（生産）面積による基準で設定されている可能性が高い。もちろん、その領域維持は族制的集団に託されるが、一定の土地が区分されることで人間集団を土地に固定化させる原理は、これまでの論理とは根本的に異なるものである。

さて、評の下に編成された「五十戸・里」に関し、670（天智9）年の庚午年籍の時点で「サトは領域的な編成原理にもとづいて編成される段階」とし、孝徳朝の天下立評以後、「国－評－五十戸制」の基本的枠組みが深化する過程が7世紀後半と評価されている〔市 2009〕。

いっぽう、領域支配へ傾斜する過程を追及した荒井秀規は、里領域区画に明確な境界はないと考えながら次のように述べた。土地の帰属確定により、口分田班給額は国毎に定められ、人口と水田面積が算出されている必要がある。また郡毎の人頭別口分田班給可能額が算出され、これを可能にしたのが評の領域的再編、里ごとの領域的編戸による庚寅年籍の作成であった。口分田の班給地である本貫地を確認し、人々を評や里に固定させることで、里の領域が成立した〔荒井 2009〕。これは持統朝の変革をより重視する考え方である。

多くの研究者は675（天武4）年の部曲廃止を重視しており、族制的編成であった部民制から領域的編成への政策的変化を考えている。また、690（持統4）年の庚寅年籍作成を重視する意見も多く、貢納集団を定量化し、領域的原理にもとづいたミヤケ・国造・部民制的段階から大改変した財政単

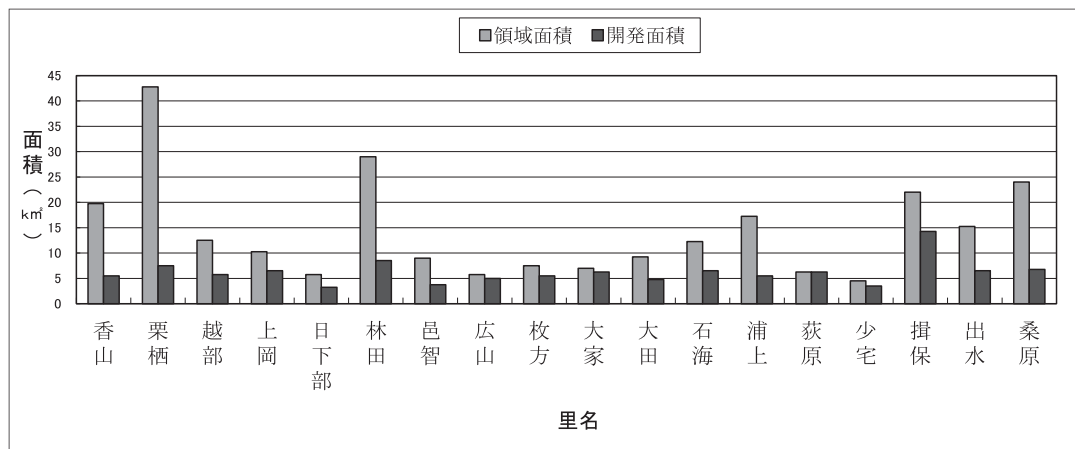


図9 揖保郡18里の領域面積と開発面積

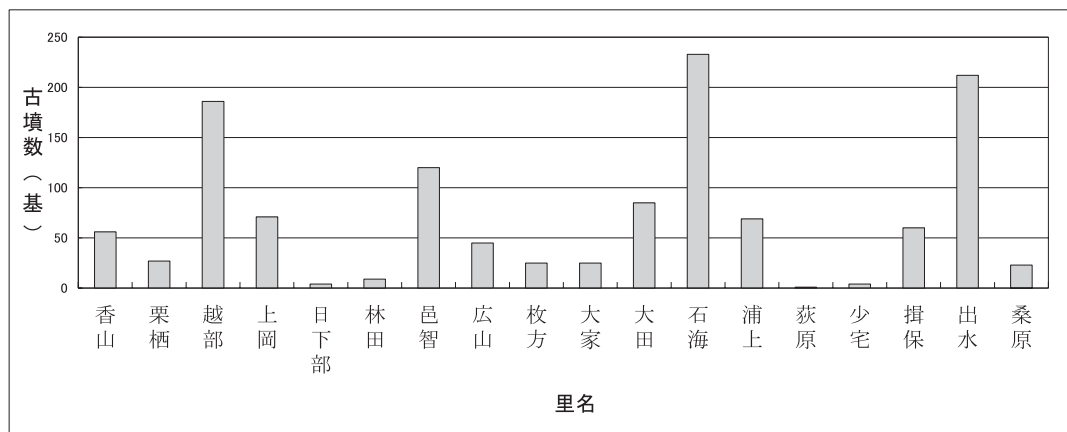


図10 揖保郡18里の里別古墳数

位としての性格が指摘されている〔岩宮2000〕。

揖保郡の里が一見して領域面積で大きな差があっても、一定の開発面積を基礎に設定されたことは疑いない。開発面積を生産面積とすれば、改新詔に「田之調」の記述があり、田の面積を基準として賦課する調がすでに現れている。50戸を支配単位とした公民制の成立を重視し、庚午年籍に大きな画期を認める立場〔吉川2004〕は、里という領域支配のはじまりを古く考えている例であろう。いずれにしても里という区画設定と領域支配は、造籍や班田を積み重ねながら実態として着実に確立していったのが7世紀後半の半世紀であった。

里の実態と郡司層

検討してきたように揖保郡界は確実に存在し、内部で里が領域設定されているのは明らかである。その里界すらも一定の明示が可能である。風土記の記載からみて、里領域の区分が明確化されるのは7世紀末の持統朝である。さかのぼって50戸1里を検証するために後期古墳を分析してみたが、里の領域に50戸といった人間集団の均等的な割付は見出せないこと、連動して古墳造営地が風土記の里領域には対応しないことなども明らかになった(図9・10)。

しかしながら、風土記をよく読むと、前代の「村」や「里（五十戸）」が継承された里とともに、新たに設定された里も多いことがわかる。前史を書いている里は、「鹿来墓」を改めた香山里、「皇子代里」（出水里では越部村と記す）を改めた越部里、人の姓による「日下部野」を改めた日下部里、握村（都可村）を改めた広山里、「大宮里」を改めた大家里、「大田村」を改めた大田里、阿曇連一族が住んでいた浦上里、「漢部里」を改めた少宅里、「泉村」を改めた出水里、倉見村（桜見村）を改めた桑原里がある。前代からの継承里は10里が数えられる。逆に言えば、風土記以前の里はこれら10里程度であったとも推定可能である。この10里を平均50戸と仮定すれば、先述したように後期古墳から算出した揖保郡総戸数474戸に近い数値になってくる。30戸編成も考慮しつつ、評制下での50戸編成と合致してくる点が興味深い。

古墳の数に関して、風土記の里とは整合しないが、それ以前に里が50戸と呼ばれていた時期の実態に近いとなれば、史料では681（天武10）年以前は「五十戸」表記のみ、混在期間を経て688（持統2）年までに「里」表記に統一されると指摘〔市2009〕されている。したがって、50戸が里へ改称されることは、単なる名前の変更ではなく、名実ともに人的制度から領域的制度への転換を表しているとも考えられる。後期古墳分析の結果とは、680年代以前の50戸編成の実態をみていた可能性があろう。里への改称は、制度的な実態をとともなうものであって、天下立評以降、地方の開発にともなって見直しを繰り返す造籍や制度改革が重ねられた。特に五十戸制から里制への改革は、律令編纂期の680年代の約10年間と位置づけられるであろう。その一つの終着点が浄御原令体制であり、持統朝の庚寅年籍が実質的な郡里制のはじまり、一面では完成として、風土記に反映された郡里の実態であったとみたい。

さて、いっぽうで前代に居住や村落の記載のない里がある。これらは里と同等の扱いではなかった領域、すなわち新設の里であろう。上記以外の、栗栖里（新設）、上岡里（分割）、林田里（新設）、邑智里（駅家）、枚方（移住）、石海里（開発）、荻原里（新設）、揖保里（新設）である。

揖保郡では、庚寅（690）年に漢部里を改めて少宅里とした記述、飾磨郡においても庚寅年に私里を少川里と号するという記述がある。50戸または里編成は、庚寅年籍を契機として領域的再編が繰り返され、風土記の記述にあたって、造籍にともなう里領域の設定は特に明記された記録があったのかもしれない。

では、なぜ揖保郡は新設を加える18里に区分され、またそれが可能となったのであろうか。多産多死型社会にあって戸の流動性はいかんともしがたく、自然災害も多い時代である。風土記編纂年までに18里が区分された理由は、50戸という基準単位に頼らない新しい原理による編戸が可能となり、揖保郡全体の土地開発領域、生産面積が一義的に規定されたからであろう。また、仕丁や兵士を出す規定がある以上、五十戸制以前の古墳数を分析するだけではみえてこない人口増加があると考えたほうがよいのではないかと。そして、口分田の班給地として均等な土地領域が最小単位の里を基準に算出され、その開発や開墾が人口増加に加えて集団移住や入植によって実現されたと考えるほかないのである。

林田里における漢人が里を成す話、枚方里の筑紫の田部を招した墾田の話、大家里では大倭の千代の勝部等を遣わして田を墾らしめ、宇治連等の遠祖が田を墾る記述、石海里では天皇の命によって石海の人夫を召して田を開墾する話、少宅里では百姓が田を為さんとして溝を開く話など、土地

を開発・開墾する話は枚挙にいとまがない。多くは他地域からの人の移住や徴発をとまなう説話であり、揖保郡において 7 世紀後半にかなりの土地開発がなされたのではないだろうか。里名も「墓、部、村」など人に関わる名が改められ、「山、岡、原、田、保」などの土地に関わる名が増加していることも重要である。

揖保郡が 17 里でも 19 里でもない理由は、50 戸で 1 里単位の人的編成を否定し、開発面積によって振り分けられた領域が 18 に区分できたからと考える。里の領域区分には里長の意思が働いたというよりも、周辺里との境界や水利権の調整が必要であるから、そこには上位権力が政治的な区分調整を発動しているに違いない。郡として里の調整に取り組むことで、揖保郡 18 里の制度は実現したのであろう。開発を前提とした人の移住や徴発記事は、天皇を含め国宰の名を冠することが多い。里に里長が置かれたとしても、直接的な支配を行使したのは地方官人であり、公権力をまとった郡司である。旧来からの「在地首長」の組織化にはさまざまな政策が立案されたが、結局のところ機能の中樞は郡にあったという。郡司が在地の共同体的諸関係を掌握し、公権力として「村落首長」を規制する性格へ転化していったという指摘[大町 1986]がある。7 世紀後半における現実の有力首長は、郡司層に限定されつつあった。古墳から郡里制度との具体的な対照はできないことを指摘したが、前節でみたように有力な終末期古墳の被葬者を郡司層に対比できそうだという点については改めて強調しておきたい。

領域支配への転換

これまで述べてきたように、まさに 7 世紀後半に地方の領域把握は進行した。従来あまり重視されなかったが、少なくとも風土記編纂までには里単位にいたる領域支配は完成をみたというべきであろう。

それ以前、古墳時代の地方掌握は首長制的な人的族制支配であった。古墳時代は古墳を媒介とした中央と地方の政治関係が指摘されるが、古墳は一代限りで更新される不安定な人制の産物である。古墳に首長系譜を読み取ろうとする試みは多いが、播磨地域においてもほとんどの前方後円墳は系譜が不安定であり、1 代、せいぜい 2・3 代限りの古墳築造も多い。ましてや古墳時代全期間を通じて首長権が継続して認められる地域は存在しない。古墳を造営した首長は、確かにその支配領域を持っていたはずであるが、それは固定的なものではなく首長個人の地位如何で拡大縮小、栄枯盛衰を繰り返す性質のものであった。少なくとも古墳からそれ以上の領域支配を読み取ることはできない。古墳時代における首長間の政治関係は、首長位就任毎にその地位を相互承認し、古墳築造で表現したものであろう。古墳から見ると、地位の継承は自動的に次代へ世襲されるようなものではなかった。古墳時代は、絶えず揺れ動く首長権力に依存し、そのような不安定な地方支配方式で成り立っていたのである。

そうした古墳時代終末の動向を一つの地域社会から描き出してみた。古墳築造の衰退は、古墳に媒介される不安定な政治秩序に対する国家的危機感が顕在化したものとみる。代わりに用意されたのは、律令という法体系を持った固定的制度的な決まりごとである。その浸透のためには、よりいっそうの地方首長の人的支配も必要であったが、せいぜい数十年で交替を余儀なくされる人的支配の不安定を解消する必要もあった。それへの対処は在地首長層に対する公権力の付与であり、その身

分に託された地位は固定的な土地領域をとまう支配権であった。律令国家の支配方式は人的支配も併用しながら、目指されたところは徹底的な土地の掌握——領域支配であった。これは土地が生み出す徴税単位の掌握であり、国家維持の根幹に関わる人と土地の地方掌握の強化である。人が替わっても、領域となる土地は固定的に支配が継続する。それを統括する制度が郡里制であり、そこには公権力としての郡司層と里長が任命された。

特に最小単位である里の実態については、五十戸制の評価がさまざまであったが、少なくとも揖保郡における里は領域として設定されているとみなす。その実態は開発（生産）面積であり、土地のほぼ均等な区分が目指されていると考えた。後期古墳や墓域の実態は里領域との整合は認めにくい。前代の族制的集団を基礎とした里の編成原理ではなく、新たに開発・生産する土地の面積を基準に、集団を土地に張りつける形で郡里は定められたのであろう。7世紀後半以降、すでに有力古墳は郡司層に限定されつつあった。つまり、7世紀末に成立した郡里は、すでに古墳時代の地域社会をとどめるものではなく、開発面積に依拠した人為的な設定によって地域社会は区分されていたのである。その区分に君臨する地域権力とは、身分的地位が明確化し、より行政的・固定的な土地支配を実現する公権力機能を持ちはじめている郡司層と思われる。ここに大きな歴史的画期を認めたい。

また、考古学的には古墳に代わって古代寺院が登場する。その分布実態は里領域と整合的であり、古墳築造との大きな違いがある。寺院造営は檀越と知識による里の統合という観点で機能している。国郡里制は、国分寺・国分尼寺を頂点に仏教という宗教思想を媒介として地域社会に新たな結合法則を仕組んだようである。さらに揖保郡下で特筆したいのは、官営道路の敷設と駅家の設置という国家事業が加わり、これらがよりいっそうの地域統合を促した可能性である。

こうして律令体制の目指した地方制度は土地領域を掌握することが重視され、首長個人の権力顕彰と族制社会の守護を祈念した古墳造営を衰退させた。同時に護国思想を標榜する仏教寺院が地域社会の再編に肩入れした。さらに交通網の整備は見せる律令国家の威信を実現し、領域支配は確実に基礎的単位である里領域までも射程に入れて実行された。徹底した土地の支配は、国家が公地公民的な政策で賦課徴税を目的としたものであった。それは古墳時代社会の首長制的な私権を否定し、領域支配を軸とした律令国家の地方制度を強化徹底するために、在地首長を官人として公権力へ転化させるものであった。

おわりに

播磨国揖保郡は、筆者の考古学研究における主な対象地域である。多くの古墳を実際に見て歩いたし、再発見、再評価した古墳も数知れない。他方、門外漢である文献史学については膨大な先行研究や学史的整理ができなかった。重要な指摘がすでにあったとしても、無知の知としてご海容いただきたい。考古学と文献史学は、同じ素材を使った研究が適切に触れ合わないために、地域史においても隔靴搔痒の思いが強かった。さいわい、播磨は『播磨国風土記』を読むことができる地域である。風土記に書かれている記述と考古学を直接的に切り結ぶことは難しいが、当時の地域社会をどう理解するかという点で双方からの接近は血の通った叙述が期待できるように思えた。

小稿が目指した検討結果は、稿頭の要旨にまとめたとおりである。繰り返さず、ここでは発案の着想について記しておきたい。

6世紀以降の後期古墳時代になると、その被葬者たる首長の政治的地位や支配領域について、考古学でも国造や部民制、国郡里制との対比を意識するようになる。郡を代表するような古墳があるか、それは国造と言えるか、では里長との対比はどうか、などが念頭におかれる。いわゆる白鳳寺院において、風土記に書かれた里長や人名との対比はすでに試みられてきたとおりである。この時代は、文献史料によって地域社会の構造が具体的に想定可能になる時期である。しかし、そうした研究は考古学用語と文献史学用語の違いや、学問的理解の地平が異なることもあって、なかなか進展していないように思っていた。

ところで、時期的に一部が重なる7世紀の国郡里制と後・終末期古墳の築造がなぜ整合しないのか、これが第1の疑問であった。第2の疑問は、風土記が厳然と里を領域区分して記し、大半が郷に引き継がれているのに、文献史学の多くはそれを領域設定と断定するのに躊躇しているようにみえた点である。どうやらそれは、「五十戸一里」という人的編成の制度が強く意識され、里制度そのものの史料もほとんどないという制約からきているように感じた。

そこで素朴な疑問から出発して、里の区分が古墳から導き出せないなら、人的なものではなく土地に根ざすものと素直に読み取ってみようと考えた。ある種、考古学的手法である。一見して大きな里と小さな里があり、この差を埋めるのは、人間活動の範囲となる開発・生産の領域ではないかと発想した。かなり乱暴な手法であったが、具体的に地図の上で面積を算出してみたのである。

はたして、領域面積の差は大きいが、開発面積の差はかなり小さくなった。一定の均等的な土地領域の区分が設定原理として働いていると確信した。里は土地の領域掌握の最小単位であり、そこまでおよんだ律令国家の土地支配は、領域区分による支配のはじまりと考えてよい。7世紀に人的支配が領域支配に転換することは漠然と言われてきたように思うが、風土記の読解と考古学的手法でほぼ実証できたように思う。具体的数値と細かい検討で、領域支配のはじまりを一つの地域から考察する可能性を描いてみたのが小稿である。

後期群集墳からは、郡（評）里制との対比も、50戸という単位を読み取ることも困難である。これは古墳造営の原理が郡里制とは異なっていることに起因するとみた。しかし、終末期の有力墳に限って郡司層との対比ができそうである。7世紀後半は、ほとんどの古墳が衰退し、郡司層のみに古墳造営が遺制として残されたこともある。

古代寺院は里制度とある程度の対比が可能である。官道整備とも連動する。古墳に代わる新たな仏教思想の浸透と交通制度、郡里制度は整合的に機能したのである。

風土記はさまざまな事柄を記しているが、揖保郡においては里の領域面積と開発面積の算出を可能にした。このことで里が確かに領域として設定され、7世紀の支配方式の転換を描き出す史料として扱うことができた。

なお、土地や領域を問題としながら条里制については触れることができなかった。一昔前まで揖保郡の条里制は明瞭に残っていたが、ほ場整備によってほとんど破壊された。また、土地支配といながら徴税単位としての分析もできなかった。もちろん、播磨国揖保郡という一つの地域に限った分析であるから、他国の風土記と他地域でも同様の検討をおこなって体系化されるべき考察であ

る。残された課題も多いが、別の機会を待つことにしたい。

蛇足ながら原稿化の過程で、多くの言葉に出会った。地域集団、戸、世帯、共同体、家長、家族、氏族、同族、族長、首長、国造、国宰、国司、郡（評）、里（郷）、制度、後期古墳、前方後円墳、領域、区分、開発、生産、開墾、徴税、出仕、仏教、寺院、檀越、知識、支配、中央、王権、政権、地方、政策、政治、経済、編成、原理、律令制などである。言葉の意味を掌握することに難渋した。同じ歴史学の世界にありながら、研究者毎に、方法論毎に、同じ概念を異なる言葉で記す違和感がある。各々の主張を共通の土俵で咀嚼し、理解することは実に難しい。もともと適当な性格のため、言葉の厳密化は早くに諦めた。しかし、共通理解の必要性、言葉の大切さ、叙述の難しさを超えて、勉強する楽しさもまた感じたのは事実である。

最後になったが、小稿の作成をお勧めくださった広瀬和雄氏、地図の作成を引き受けて下さった岩井顕彦氏、援助いただいた船曳日登美、松原美穂子、山口純子各氏に記してお礼申しあげる。

なお、小稿は平成 22～24 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「播磨国風土記の現地調査研究を踏まえた古代地域社会像の提示と方法論の構築」の成果を一部含んでいる。

引用・参考文献

- 秋本吉郎 1958『風土記』日本古典文学大系 2 岩波書店
 荒井秀規 2009「領域区画としての国・評（郡）・里（郷）の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所
 飯泉健司 1994「播磨国風土記・佐比岡伝承考」『古代文学』第 33 号 古代文学会
 石田善人 1978「『風土記』の世界」『龍野市史』第 1 巻 龍野市
 市 大樹 2009「荷札木簡からみた「国－評－五十戸」制」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所
 井上通泰 1931『播磨国風土記新考』大岡山書店
 いひほ学研究会 2009『いひほのこおり十八里―播磨国風土記マップ』
 今里幾次 1984「古瓦出土遺跡」『龍野市史』第 4 巻 龍野市
 今里幾次 1995『播磨古瓦の研究』真陽社
 今里幾次 2003「播磨の古代寺院と檀越」『古代寺院からみた播磨』第 3 回播磨考古学研究集会実行委員会
 今里幾次 2005「栗栖廃寺」「越部廃寺」『播磨新宮町史』文化財編 たつの市
 今里幾次 2010「山田廃寺」「伊勢大池遺跡」「下太田廃寺」『姫路市史』第 7 巻下 資料編考古 姫路市
 今津勝紀 2003「日本古代の村落と地域社会」『考古学研究』第 50 巻第 3 号 考古学研究会
 今津勝紀 2007「里と人口」『風土記からみる古代の播磨』神戸新聞総合出版センター
 岩宮隆司 2000「律令里制の歴史的前提」『ヒストリア』第 169 号 大阪歴史学会
 植垣節也 1997『風土記』新編日本古典文学全集 5 小学館
 大谷輝彦 2010「ドンデン古墳群」「下太田廃寺」『姫路市史』第 7 巻下 資料編考古 姫路市
 大町 健 1986『日本古代の国家と在地首長制』校倉書房
 沖森卓也・佐藤 信・矢嶋 泉 2005『播磨国風土記』山川出版社
 片岡宏二 2000「続・古代の点と線」『古文化談叢』45 九州古文化研究会
 門井直哉 2009「歴史地理学からみた郡域編成の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所
 岸本道昭 1999「6 世紀集落と古墳造営の変革」『長尾・小畑遺跡群』龍野市教育委員会
 岸本道昭・中濱久喜・成瀬敏郎 2001「長尾葉師塚古墳」『北山遺跡』龍野市教育委員会
 岸本道昭 2009「粒丘考」『いひほ研究』創刊号 いひほ学研究会。のちに「粒丘と揖保里の再検討」『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』（平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書）坂江 渉・神戸大学大学院人文学研究科 2010 へ改訂所収
 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
 坂江 渉ほか 2005「風土記の世界」『播磨新宮町史』史料編 I 新宮町

-
- 芝香寿人・中溝康則 1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』御津町教育委員会
竹内 亮 2012「古代の造寺と社会」『日本史研究』第 595 号 日本史研究会
西口圭介 1995「西脇古墳群の構造について」『西脇古墳群』兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会 2011『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会
中濱久喜 2002「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨』第 2 回播磨考古学研究集会実行委員会
中濱久喜 2005「天神山古墳群」「上笹古墳群」「はっちょう塚古墳群」『播磨新宮町史』文化財編 たつの市
中濱久喜 2010「浄安寺古墳」『姫路市史』第 7 巻下 資料編考古 姫路市
第 3 回播磨考古学研究集会実行委員会 2003『古代寺院からみた播磨』
菱田哲郎 2005「古代日本における仏教の普及」『考古学研究』第 52 巻第 3 号 考古学研究会
広瀬和雄 1978「群集墳論序説」『古代研究』15 元興寺文化財研究所。のちに『古墳時代政治構造の研究』塙書房
2007 に所収
広瀬和雄 2009「古墳時代像再構築のための考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 150 集 国立歴史民俗博物館
福島好和 1996「古代国家と地方開発」『太子町史』第 1 巻 太子町
福島好和 2005「記紀伝承と風土記の世界」『揖保川町史』第 1 巻 本文編 I 揖保川町
福島好和 2005「記紀伝承と風土記の世界」『御津町史』第 1 巻 御津町
別府洋二ほか 2006『小犬丸中谷廃寺・中谷遺跡・中谷古墳』兵庫県教育委員会
松本正信 2002「馬立古墳群の構成」『姥塚古墳』新宮町教育委員会
水野正好 1970「群集墳と古墳の終焉」『近畿』古代の日本 5 角川書店
山中敏史 1986「律令国家の成立」『変化と画期』岩波講座 日本考古学 6 岩波書店
吉川真司 2004「律令体制の形成」『日本史講座』第 1 巻 東京大学出版会
-

引用図出典

- 図 2：段彩図は岩井顕彦
図 3：中濱 2005, 松本 2002, 西口 1995 から複写, いずれも一部改編
図 5：中濱 2005, 岸本・中濱・成瀬 2001, 中濱 2010 から複写, いずれも一部改編
図 7：瓦拓影を今里 1995, 同 2010, 別府ほか 2006 から使用

(たつの市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(2012 年 9 月 26 日受付, 2012 年 12 月 10 日審査終了)

Local Communities and Governance of Domains in the 7th Century : Kofun, Temples, and Establishment of Villages in Ibo County, Harima Province

KISHIMOTO Michiaki

By analyzing the records of Ibo County in Harima Province, this paper explores the political evolution of the Japanese Islands, from the Kofun period (period of ancient burial mounds) through to a nation governed under *ritsuryo* codes. From the Harima no Kuni Fudoki (Local History of Harima Province), 18 villages recorded in the Ibo County section were accurately identified and compared with the local state of *kofun* and temples at that time. In Ibo County 11 late keyhole-shaped *kofun* (burial mounds) from the mid-6th century, and 1,255 *kofun* from the later Kofun period were counted. We assumed approximately 400 to 500 families (households) would be involved in the construction of a *kofun*; however, it was found that this estimate was not consistent with the conceptual domain of the village – one village consisting of only some 50 households. Concerning the prominent *kofun* in the later 7th century, we were able to consider the county head officials as the *kofun* owners. The number of temples built during the 7th to 9th centuries was 14, which indicates a distribution similar to the concept of one temple per village. Since temples are consistent with villages, it can be considered Buddhist temples promoted the integration of a village or local community. In addition, construction of temples along government roads was thoroughly ensured for each village, and it can be inferred that the nation under the *ritsuryo* codes aimed at the spread of Buddhism as a means to keep the country safe.

With regard to the principle of the establishment of 18 villages, the domain was divided according to the equable development (production) area, not by the total area of a village. This finding shows that counties and villages were divided as basic units to comprehensively govern the land domain, and not simply controlled by a patriarchal system based around the *kofun* of chieftains. They are also the calculation unit for any levy on land and tax collection aimed at some degree of development. Governing by chieftains in the Kofun period with unstable domains was denied, and the nation under the *ritsuryo* codes gave governmental authority to the chieftain of a local area such as a county head official to exercise firm control of the land domain. This was a county-village system, and it can be considered that real completion of domain control in Ibo County and villages, Harima Province was made during the reign of Empress Jito at the end of the 7th century.

Key words: Late period kofun, old temple, Harima no Kuni Fudoki (Local History of Harima Province), domain control of villages, development area
